

期 日 二〇二三年十月七日(土)・八日(日)
会 場 大阪大学豊中キャンパス

日本中国学会 第七十五回大会要項

主 催 日本中国学会
共 催 大阪大学大学院人文学研究科

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、来る十月七日（土）及び八日（日）の両日にわたり、日本中国学会第七十五回大会を大阪大学豊中キャンパスにて、大阪大学大学院人文学研究科との共催により開催致します。万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますようご案内申し上げます。

今年の大会は、人員不足のため、オンラインによる配信は行わず、対面のみとなります。ご参加の方は、同封の振込用紙を使用し、二〇二三年九月二十二日（金）までにお振り込みください。振替受領証を以て領収書に代えさせていただきます。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

敬 具

二〇二三年八月二十五日

日本中国学会理事長 大木 康
第七十五回大会準備会代表 浅見 洋 二

会員各位

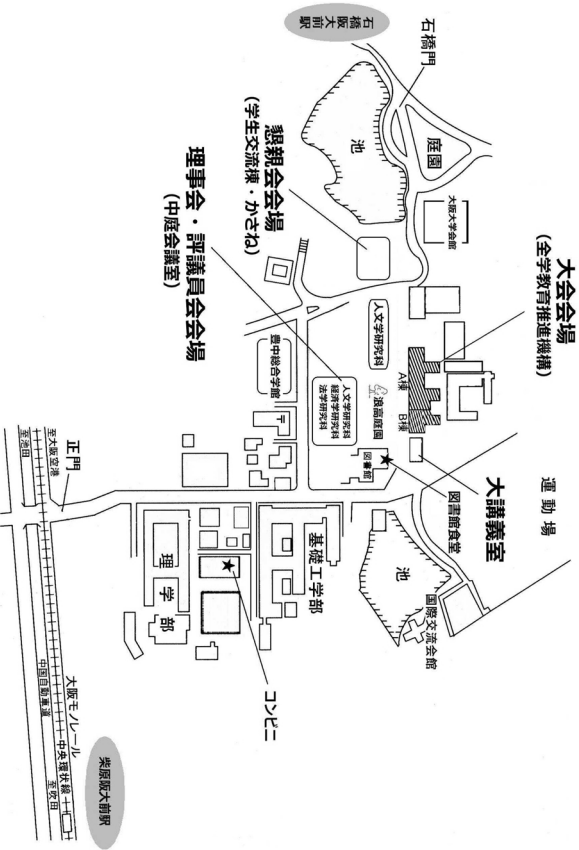
日本中国学会第七十五回大会

2023年10月6日(金)～8日(日)

日時		行事	会場
6日 (金)	13:00	理事会	人文学研究科「中庭会議室」
	15:00	評議員会	人文学研究科「中庭会議室」
7日 (土)	9:00	受付開始	全学教育推進機構 A・Bピロティ
	9:30	開 会 式	大講義室
	10:00	書評シンポジウム	第一会場 全学教育推進機構 A202
		研究発表	(各会場)
		Ⅱ. 文学・語学部会 (A)	第二会場 全学教育推進機構 B207
		Ⅱ. 文学・語学部会 (B)	第三会場 全学教育推進機構 B208
		Ⅲ. 日本漢学部会	第四会場 全学教育推進機構 A104
	11:55	昼休憩	
	12:10	記念撮影	全学教育推進機構前
	13:30	研究発表	(各会場)
		I. 哲学・思想&歴史部会	第一会場 全学教育推進機構 A202
		Ⅱ. 文学・語学部会 (A)	第二会場 全学教育推進機構 B207
		Ⅱ. 文学・語学部会 (B)	第三会場 全学教育推進機構 B208
		Ⅲ. 日本漢学部会	第四会場 全学教育推進機構 A104
17:00	総 会	大講義室	
18:00	懇 親 会	かさね (学生交流棟)	
8日 (日)	9:30	受付開始	全学教育推進機構 A・Bピロティ
	10:00	書評シンポジウム	第四会場 全学教育推進機構 A104
		研究発表	(各会場)
		I. 哲学・思想&歴史部会	第一会場 全学教育推進機構 A202
	11:55	昼休憩	
	13:30	研究発表	(各会場)
		I. 哲学・思想&歴史部会	第一会場 全学教育推進機構 A202
		Ⅱ. 文学・語学部会 (A)	第二会場 全学教育推進機構 B207
		Ⅲ. 日本漢学部会	第四会場 全学教育推進機構 A104
	16:00	閉 会 式	大講義室

- ◆学会事務局/大会準備会控室 A103
- ◆休憩室 A102、B107
- ◆手荷物預かり A101
- ◆書店出版社展示 A・B 1階

大会会場案内図 【大阪大学 豊中キャンパス周辺図】



時間帯一覧表

7日(土)															
18:00 -	17:00 -	16:00 - 16:25	15:30 - 15:55	15:00 - 15:25	14:30 - 14:55	14:00 - 14:25	13:30 - 13:55	11:55 - 13:30	11:30 - 11:55	11:00 - 11:25	10:30 - 10:55	10:00 - 10:25	9:30 - 9:50		
【懇親会】 かさね(学生交流棟)	【総会】 大講義室	孔 詩 (26)	胡 婧 (25)	藤田 衛 (24)	海藤 水樹 (23)	金スマロ (22)	趙 珊 (21)	昼 休 憩 【記念撮影】全学教育推進機構前	書評シンポジウム・パネルI ○齋藤 智寛・藤井 倫明 奥野新太郎・村田 みお 劉 青 (18)				【開会式】 大講義室	第一会場 I. 哲学・思想&歴史 (全学教育推進機構A202)	
		席 暢 (45)	乾 源俊 (44)	ガイ・ホップス (43)	王 若冲 (42)	劉 孟磊 (41)	唐 鈺 (40)		早川 侑哉 (39)	張 禧睿 (38)	林 暁光 (37)	木村 剛大 (36)			第二会場 II. 文学・語学(A) (全学教育推進機構B207)
		金 文京 (60)	孫 楊洋 (59)	呂 輝菲 (58)	陳 曉淇 (57)	辜 知愚 (56)	林 麗婷 (55)		方 逸韻 (54)	黄 詩琦 (53)	史 雨 (52)	小川 主税 (51)			第三会場 II. 文学・語学(B) (全学教育推進機構B208)
		安原 大熙 (70)	石橋 賢太 (69)	カバツソ・ダニーロ (68)	謝 文君 (67)	郭 俣 (66)	項 依然 (65)		陳 文佳 (64)	陳 竺慧 (63)	稲森 雅子 (62)	劉 欣佳 (61)			第四会場 III. 日本漢学 (全学教育推進機構A104)

8日(日)												
16:00-16:25	16:30-15:55	15:00-15:25	14:30-14:55	14:00-14:25	13:30-13:55	11:55-13:30	11:30-11:55	11:00-11:25	10:30-10:55	10:00-10:25		
【閉会式】 大講義室		井澤 耕一 (35)	兪 昕雯 (34)	王 杏芳 (33)	佟 欣妍 (32)	市村俊太郎 (31)	昼 休 憩		胡 華喩 (30)	莫 寒 (29)	渡邊 義浩 (28)	板橋 暁子 (27)
		汪 洋 (50)	葉 宇軒 (49)	早川 大基 (48)	陳 禕璇 (47)	浅見 洋二 (46)			書評シンポジウム・パネルⅡ(第四会場全学教育推進機構A104) ○大村 和人・金 鑫・高山 大毅・藤田 衛 (19)			
			辻井 義輝 (74)	張 仕琪 (73)	徐 爽 (72)	宮本 陽佳 (71)						

※氏名欄の(数字)は発表要旨掲載頁

◆諸会費

- ・大会参加費 2,000円
- ・懇親会費 4,500円(学生3,500円)
- ・昼食弁当代 1,000円(二食)

◆ご案内

- ・キャンパス内は指定喫煙所のみ喫煙可能です。ご協力をお願いいたします。
- ・7日(土)のみ、図書館下食堂が営業予定です。また、キャンパス内には売店(図書館下)やコンビニエンスストア(ローソン)がございます。
- ・8日(日)は、学食や近隣の飲食店の多くがお休みとなります。事前に昼食を持参されるか、お弁当をお申し込みください。
- ・託児所の利用には事前に申し込みが必要です。詳細については裏表紙の裏をご覧ください。

日本中国学会第七十五回大会プログラム

書評シンポジウム

パネルⅠ

松下 道信著『宋金元道教内丹思想研究』（十月七日（土）十時～十一時五十五分、全学教育推進機構 A202）

評者

藤井 倫明（九州大学）

奥野 新太郎（岡山理科大学）

村田 みお（近畿大学）

劉 青（弘前大学）

著者

松下 道信（皇學館大学）

司会

齋藤 智寛（東北大学）

パネルⅡ

宋 晗著『平安朝文人論』（十月八日（日）十時～十一時五十五分、全学教育推進機構 A104）

評者

金 鑫（日本学術振興会外国人特別研究員）

高山 大毅（東京大学）

藤田 衛（広島大学 非常勤講師）

著者

宋 晗（フェリス学院大学）

司会

大村 和人（徳島大学）

研究発表

I 哲学・思想&歴史部会（第一会場 全学教育推進機構 A202）
十月七日（土）午後

I-1 包山卜筮祭祷簡における「凶攻解」についての再検討（十三時三十分～十三時五十五分）

趙 珊（北海道大学大学院）

司会 末永 高康（広島大学）

I-2 黄老学における命論の探求——『黄帝四経』と『鶡冠子』を中心として（十四時～十四時二十五分）

金 スマロ（東京大学大学院）

司会 末永 高康（広島大学）

I-3 司馬彪『莊子注』と先秦名家（十四時三十分～十四時五十五分）

海藤 水樹（東京大学大学院）

司会 和久 希（二松学舎大学）

I-4 「古易」は如何にして復元されたか——晁説之『古周易』を例に取って（十五時～十五時二十五分）

藤田 衛（広島大学 非常勤講師）

司会 吾妻 重二（関西大学）

I-5 熊十力の「純粹カテゴリー」について

——『新唯識論（語体文本）』第七章「成物」を中心に（十五時三十分～十五時五十五分）

胡 婧（日本学術振興会特別研究員）

司会 吾妻 重二（関西大学）

I-6 元朝における「聖旨焚毀諸路偽道藏經之碑」の全国頒布とその実態の考察(十六時〜十六時二十五分)

孔 詩(東京大学大学院)

司会 松下 道信(皇學館大学)

十月八日(日)午前

I-7 東晋元帝と後漢光武帝をめぐる礼議(十時〜十時二十五分)

板橋 暁子(東京大学)

司会 古勝 隆一(京都大学)

I-8 東晋の貴族制と五等爵(十時三十分〜十時五十五分)

渡邊 義浩(早稲田大学)

司会 古勝 隆一(京都大学)

I-9 『論語』曾子三省章の朱注に関する再検討(十一時〜十一時二十五分)

莫 寒(北海道大学大学院)

司会 白井 順(東洋大学)

I-10 臨江における十四世紀知識社会の発展

——梁寅の道統論の受容を中心に(十一時三十分〜十一時五十五分)

胡 華喩(東京大学大学院)

司会 白井 順(東洋大学)

十月八日(日)午後

I-11 中国北朝における婚姻制限と親族意識(十三時三十分〜十三時五十五分)

市村 俊太郎(北海道大学大学院)

司会 仙石 知子(二松学舎大学)

I-12 「解字」から「窮理」へ——王安石の字学(十四時〜十四時二十五分)

修 欣妍(東京大学大学院)

司会 福谷 彬(京都大学)

I-13 江戸時代における宋明認識について——高志泉溟から古賀精里へ(十四時三十分〜十四時五十五分)

王 杏芳(東京大学大学院)

司会 福谷 彬(京都大学)

I-14 図譜の類書「三才図会」の編集と刊行——編集者の交代をめぐって(十五時〜十五時二十五分)

兪 昕雯(お茶の水女子大学 研究協力員)

司会 大木 康(東京大学)

I-15 長江流域における経学史および中国史研究の成立とその展開

——近代日本の中国学との邂逅(十五時三十分〜十五時五十五分)

井澤 耕一(茨城大学)

司会 内山 直樹(千葉大学)

Ⅱ 文学・語学部会(A) (第二会場 全学教育推進機構 B207)

十月七日(土)午前

ⅡA-1 楚辭に於ける「対天」表現(十時〜十時二十五分)

木村 剛大(國學院大學非常勤講師)
司会 谷口 洋(東京大学)

ⅡA-2 六朝文人における「懶」の諸相(十時三十分〜十時五十五分)

林 暁光(大阪大学)
司会 大平 幸代(奈良女子大学)

ⅡA-3 六朝隋唐期の雨乞いにおける僧侶像の変容

——身体毀損と身体復元モチーフを手がかりに(十一時〜十一時二十五分)
張 禧睿(名古屋大学大学院)

ⅡA-4 王維と「桃花源」——典故に応答するということ(十一時三十分〜十一時五十五分)

早川 侑哉(東京大学大学院)
司会 遠藤 星希(法政大学)

十月七日(土)午後

ⅡA-5 唐代以前の小説中の山のイメージの変化(十三時三十分〜十三時五十五分)

唐 鈺(立命館大学客員研究員)
司会 佐野 誠子(名古屋大学)

II A-6 唐詩における楊貴妃像の推移と発展(十四時〜十四時二十五分)

劉 孟磊(神戸大学大学院)

司会 佐野 誠子(名古屋大学)

II A-7 魚玄機の詩に見られる「風月滿庭」(十四時三十分〜十四時五十五分)

王 若冲(岡山大学大学院)

司会 二宮 美那子(滋賀大学)

II A-8 花蕊夫人の「宮詞」における宮廷女性の表象(十五時〜十五時二十五分)

ガイ・ホツブス(大阪大学大学院)

司会 二宮 美那子(滋賀大学)

II A-9 李白「素畜道義」考(十五時三十分〜十五時五十五分)

乾 源俊(大谷大学)

司会 静永 健(九州大学)

II A-10 李紳の詩文における儒家的文学観(十六時〜十六時二十五分)

席 暢(慶應義塾大学大学院)

司会 静永 健(九州大学)

十月八日(日)午後

II A-11 「有力」と「無意」——中国の詩学における風と水のイメージをめぐる(十三時三十分〜十三時五十五分)

浅見 洋二(大阪大学)

司会 緑川 英樹(京都大学)

II A-12 唐汝詢『唐詩解』の出版過程とその選詩基準（十四時～十四時二十五分）

陳 禕璇（九州大学大学院）

II A-13 「文学」の一形態——葉小鸞の作品をどう読むか（十四時三十分～十四時五十五分）

司会 野村 鮎子（奈良女子大学）

早川 太基（神戸大学）

II A-14 傍観と好奇——『明史・列女伝』の書法（十五時～十五時二十五分）

司会 野村 鮎子（奈良女子大学）

葉 宇軒（東京大学大学院）

II A-15 趙翼の「汪文端公挽詩一千字」について（十五時三十分～十五時五十五分）

司会 野村 鮎子（奈良女子大学）

汪 洋（九州大学大学院）

司会 田口 一郎（東京大学）

II 文学・語学部会（B）（第三会場 全学教育推進機構 B208）

十月七日（土）午前

II B-1 「傍観者」の大学叙事——老舎『趙子曰』における理想と現実（十時～十時二十五分）

小川 主税（大阪大学大学院）

司会 中野 知洋（大阪教育大学）

II B-2 東アジアのインセスト・タブー——張資平による島崎藤村の受容(十時三十分～十時五十五分)

史 雨(神戸大学大学院)

司会 中野 知洋(大阪教育大学)

II B-3 中国詩における「格律」の追求と近代アメリカ詩学教材

——一九二〇年代初期の聞一多と吳宓を中心に(十一時～十一時二十五分)

黄 詩琦(京都大学 非常勤講師)

司会 中野 徹(近畿大学)

II B-4 『学生雑誌』読者交流欄における「新文学批判」について(十一時三十分～十一時五十五分)

方 逸韻(大阪大学大学院)

司会 中野 徹(近畿大学)

十月七日(土)午後

II B-5 『沈香屑・第二炉香』の内外——張愛玲が描く香港の白人社会(十三時三十分～十三時五十五分)

林 麗婷(関西学院大学)

司会 羽田 朝子(秋田大学)

II B-6 徐志摩「關於女子——蘇州女中講稿」にみる一九二〇年代中国の女性文学観(十四時～十四時二十五分)

辜 知愚(奈良女子大学非常勤講師)

司会 津守 陽(京都大学)

II B-7 魯迅「スパルタの魂」執筆意図考(十四時三十分～十四時五十五分)

陳 曉淇(関西大学大学院)

司会 鈴木 将久(東京大学)

II B-8 曼陀の翻案小説『滑稽小説 女学生旅行記』(下巻)における女学生描写

——五峰仙史『続滑稽女学生旅行』との比較を中心に(十五時～十五時二十五分)

呂 輝菲(名古屋大学大学院)

司会 加部 勇一郎(立命館大学)

II B-9 旅する字書——近世における『諧聲品字箋』受容の諸相(十五時三十分～十五時五十五分)

孫 楊洋(京都大学大学院)

司会 鈴木 慎吾(大阪大学)

II B-10 明嘉靖刊『雍熙樂府』のテキストとその時代背景(十六時～十六時二十五分)

金 文京(京都大学名誉教授)

司会 三浦 秀一(東北大学)

III 日本漢学部会(第四会場) 全学教育推進機構 A104)

十月七日(土)午前

III-1 江戸漢詩における中井竹山『詩律兆』の意義(十時～十時二十五分)

劉 欣佳(早稲田大学大学院)

司会 黒田 秀教(福井大学)

Ⅲ-2 清華大学教授劉文典の重建懷德堂訪問について

——錢稻孫、曹禺らの集合記念写真を手がかりに(十時三十分～十時五十五分)

稲森 雅子(九州大学専門研究員)

司会 黒田 秀教(福井大学)

Ⅲ-3 昌平鬢を中心とした填詞活動の再考——作品の成立過程をめぐって(十一時～十一時二十五分)

陳 竺慧(山形大学)

司会 齋藤 希史(東京大学)

Ⅲ-4 「孤臣」としての成島柳北の漢詩文創作

——『柳橋新誌』における『板橋雜記』の受容を中心に(十一時三十分～十二時五十五分)

陳 文佳(華東師範大学)

司会 齋藤 希史(東京大学)

十月七日(土)午後

Ⅲ-5 富永仲基の「道」論——「誠の道」と「三教の道」の関係を中心に(十三時三十分～十三時五十五分)

項 依然(中国人民大学)

司会 湯城 吉信(大東文化大学)

Ⅲ-6 荻生徂徠「天」観の系譜・構造と意図(十四時～十四時二十五分)

郭 俣(中国人民大学)

司会 湯城 吉信(大東文化大学)

Ⅲ-7 頼山陽における蘇軾の文章の受容について——史論、策を中心に（十四時三十分～十四時五十五分）

謝文君（北京大学院）

司会 町 泉寿郎（二松学舎大学）

Ⅲ-8 昌平坂学問所における漢籍分類法の変遷について（十五時～十五時二十五分）

カパツン・ダニーロ（慶應義塾大学院）

司会 町 泉寿郎（二松学舎大学）

Ⅲ-9 西川如見の「水土」論とその思想史的位置（十五時三十分～十五時五十五分）

石橋 賢太（日本学術振興会特別研究員）

司会 宮崎 順子（関西大学非常勤講師）

Ⅲ-10 茉莉園詩派の『茉莉花』詩に関する一考察——艶詩の *potentiality* に着目して（十六時～十六時二十五分）

安原 大熙（東京大学院）

司会 津守 陽（京都大学）

十月八日（日）午後

Ⅲ-11 創作白話小説の方法——『白話文集』を中心に（十三時三十分～十三時五十五分）

宮本 陽佳（京都先端科学大学）

司会 奥村 佳代子（関西大学）

Ⅲ-12 池田大伍の元雑劇論について——中国戯曲受容の視点から（十四時～十四時二十五分）

徐 爽（韶関学院）

司会 伴 俊典（早稲田大学）

Ⅲ 13 「宋四大書」の日本における受容について（十四時三十分～十四時五十五分）

張 仕琪（広島大学大学院）

司会 高山 大毅（東京大学）

Ⅲ 14 忘れられた漢詩人千葉昌胤の渡韓以後

——日本漢学史における植民地文学の一展開（十五時～十五時二十五分）

辻井 義輝（東洋大学客員研究員）

司会 高山 大毅（東京大学）

書評シンポジウム

(要旨)

パネルⅠ

松下 道信著『宋金元道教内丹思想研究』（汲古書院、二〇一九年二月刊行、本文五〇〇頁）

本書は、中国近世期における道教の内丹思想を取り扱ったものである。第Ⅰ部では、宋から元における内丹思想、特にその中心となる性命説を全真教との関係の中で考察する。宋代以降、道教では内丹術が隆盛するが、北宋・金交替期の混乱の中、全真教に代表される、いわゆる「新道教」が登場する。この「新道教」という呼称は、日本では常盤大定『支那に於ける仏教と儒教道教』（一九三〇）、中国では陳垣『南宋初河北新道教考』（一九四一）に遡る。問題は、全真教を「新道教」とするこれらの言説の背後には、当時の日中双方の近代的視点が投影されていると考えられることである。

そこで第Ⅰ部では、こうした問題意識の下、全真教を、それが登場してきた内丹道との関係の中に置き直し、性命説を中心に検証した。これにより、「旧道教」とされた、全真教に先行する北宋の張伯端以下の内丹道でも既に頓悟が重視されていたこと、張伯端以下の内丹道と全真教の教説は機根や、上中下乗といった三乗の思想で整理でき、連続性を持つことを明らかにした。また、その後の元・陳致虚らが命術の重要性を強調した背景には、禪宗や朱子学とはまた異なる宗教的なあり方への志向があるだろうことを指摘した。

第Ⅱ部では、日本の神道、特に吉田神道と内丹思想の関係について、『修真九転丹道図』の内丹思想とその伝承を中心に、吉田神道で重視される北斗経との関係も含め、考察した。

パネリスト

評者 藤井倫明（九州大学。宋明性理学）

奥野新太郎（岡山理科大学。元代文学）

村田みお（近畿大学。中世仏教）

劉青（弘前大学。近世医学、養生思想）

著者 松下道信（皇學館大学）

司会 齋藤智寛（東北大学）

パネルⅡ

宋 哈著『平安朝文人論』（東京大学出版会、二〇二一年四月刊行、三六二頁）

本書は、平安朝文人の伝記的事実に基づく人物像や、彼らの社会的属性・思想的特性の究明ではなく、漢詩文の視角から平安朝文人の精神史を素描したものである。

律令制を導入した古代日本では、漢文による文書行政を運営するため、公共的な文章（詔勅から公宴で享受される詩賦まで）の作成に精通した官人が養成された。本書では特に、大学寮文章科で漢文の読み書きを専門的に学習した者を文人と定義し、彼らがいかに公共的な文章の世界を媒介として自己表現を開拓していったのか、公私に渉る平安朝漢文学という表現世界の形成過程を照射した。具体的には、九世紀初頭からほぼ三世紀を視野に入れ、菅原道真をはじめとする文人

の漢文作品を通時的に分析した。考察の要点は大略以下の三点である。

一、公共の場で通用する漢文学の表現が私的な述作に応用されることで、個々の文人ならではの表現が派生していったこと。

二、中唐古文の新動向を承ける白居易の散文が、『白氏文集』が広く受容されるようになった九世紀後半以降の平安朝において、個人的な漢文の散文のモデルとなったこと。特に、中唐に勃興した散文ジャンルである「記」が重視されていたこと。

三、六朝・唐文学をモデルとした平安朝漢文学が、十世紀を境目にして、平安朝文人の詩文に平安朝文人が影響を受けるといような、自律的な表現史の展開が顕在化していったこと。

パネリスト

評者 金鑫（東京大学人文社会科学系研究科・日本学術振興会外国人特別研究員。中国六朝・唐代の詩と文）

高山大毅（東京大学。徂徠学を中心とする近世日本思想史・漢文学）

藤田衛（広島大学非常勤講師。漢代易学）

著者 宋晗（フェリス女学院大学）

司会 大村和人（徳島大学）

I 哲学・思想&歴史部会

(発表要旨)

I-1 包山卜筮祭禱簡における「凶攻解」についての再検討

趙 珊 (北海道大学大学院)

一九八七年に湖北省荊門市包山二号墓から、楚国の司法関係に関わる「文書簡」と随葬品の目録である「遣策」とあわせて、極めて重要な竹簡資料である「卜筮祭禱簡」が発見された。「卜筮祭禱簡」とは戦国時代の楚において、貞人(巫祝)たちが封君や世族の屋敷に招かれ、依頼者のために向こう一年間の安危の有無や、災いをもたらした祟りの所在を貞問した際、もし何らかの憂患が占断された場合に、それを解除するための祭品を捧げる祭禱案や、祭品を使わぬ「凶攻解」案(本稿では「凶攻解」案を「移崇」案と理解している)などを提示した記録、およびその祭禱の実施記録を含むものである。本発表では、包山卜筮祭禱簡における「凶攻解」に注目して再び検討しようとするものである。

解読された簡文の内容を通じて、楚人は神霊と祖先へ祭品を供えて祭るだけでなく、文末によく天神や厲鬼に対して「凶攻解」という儀式を行うことによって無事や健康を祈っていたことが分かる。多数の学者は「凶(命)攻解於十鬼神名」の意味は言辞を用いて鬼神を責め、解除を求めること(以辭責讓、以求解脫)だと考え、即ち「攻」を「六祈」の一つとして解釈する。その主な根拠としては、『周禮』大祝の鄭注「攻説は、則ち辭を以て之を責む」という解釈と関連付けるのである。ただし、このような解釈では矛盾する部分がなお存在するため、本発表においては、「凶」「攻」「解」の意味を個別に解釈・考察し、他の歴史文献や出土資料と比較することで、「凶攻解」の意味を再検討する。

要するに、「攻」は動詞ではなく、祭祀名を指す名詞でもなく、むしろ「攻尹之□執事人」に属する職能(またその人)を指している可能性が高いと考える。また、「凶攻解」は鬼神を祓うことではなく、攻(巫祝などと類似する職能人)が何らかの儀式を行い、鬼神との交流を通じて「移崇」をすることであり、この儀式は依頼者の憂患を解消する方法の一つであったと考える。

I-2 黄老学における命論の探求——『黄帝四経』と『鶡冠子』を中心として

金 スマロ（東京大学大学院）

本発表の目的は、黄老学のテキストである『黄帝四経』と『鶡冠子』を考察し、その中に存在する「命」の概念を明らかにすることである。黄老学は前漢初期に流行した道家の一派を指す。長い間偽書として扱われた黄老学のテキスト（『鶡冠子』、『文子』など）は、『黄帝四経』のような出土文献の発見と共にそれらとの関連性が認められ、伝統的な偽書説はかなり払拭された。 「命」の概念は西周時代に「天命」の概念が登場して以来、天から人間に与えられる作用全般を意味し、先秦時代における「命」に関する議論は儒家、墨家、道家など多岐にわたった。黄老学は戦国時代から前漢初期までの時期に当時の諸思想を統合し体系化した。その中には「命」の概念も含まれていた。先行研究では主に黄老学のテキストの真偽、或いは核心的な思想としての「道法論」などが問題とされた。黄老学における「命」論を具体的に調べると、倫理的価値を中心とする（『孟子』、『礼記』中庸など）内在的な「命」と、主に運命の意味を持つ（『論語』顔淵、『莊子』など）外在的な「命」の理解を「道」を中心に一元化しようとしたことが分かった。特に、外在的な「命」はこのような一元化により、人間の知的作用により捉えられるようになった。このような思想的な試みを通じて黄老学の具体的な成立時期を特定することはできないが、これらには『淮南子』などの前漢初期のテキストと類似した傾向が見られると思われる。

現在『黄帝四経』以外にも、古代中国の具体的な思想の展開を考察できる多量の出土文献が発見されている。この中には「命」に関する内容が含まれている文献も存在する。本発表では黄老学のテキストの中で比較的「命」に関する言及が豊富に含まれている『黄帝四経』と『鶡冠子』を中心に、先行研究の内容を踏まえ、戦国時代の諸文献を参照しながら黄老学における「命」論の具体的な内容、その意味などを明らかにしたい。

先秦期に言語表現や逆説表現をめぐる言説を展開した思想家の著作は、『漢書』芸文志にまとめられた際に「名家」の名を与えられた。（今これを「先秦名家」と称する。）一方、『隋書』経籍志には六朝期に「名家」と称された各種の書物が確認できるが、この中には当時の政治状況と相俟って著された人物鑑定の書物が含まれており、先秦名家とは異なる様相を呈することが指摘されている。（湯用彤「読『人物志』」など。今これを「六朝名家」と称する。）しかし、魏晋期における先秦名家の受容および六朝名家への移行については、まだ十分明らかでない点がある。

六朝期にも先秦名家の系譜が絶えたわけではなく、西晋の郭象の『莊子注』などにも先秦名家の言説を応用した論理が反映している。しかし、先秦名家そのものに注目した人物としては西晋の魯勝の『墨弁注』のみが知られ、これも今では『晋書』にその序を残して滅んでいく。これを除くと、清代に先秦諸子への関心が高まるまで、先秦名家の目立った研究は行われていないとされている。

本発表では、西晋の司馬彪の『莊子注』を題材とし、その先秦名家の言説に対する理解を検討することで、魏晋期における先秦名家の受容の諸相を明らかにすることを試みる。本書は五十二篇本『莊子』に対する完備した注釈であり、郭象にも参照されていた。すでに散逸しているが、唐の陸徳明の『經典釈文』などに断片が保存されており、中でも天下篇の部分はある程度まとまった内容が残るため、司馬彪が恵施らによる詭弁に詳細な注釈を付していたことを知ることができ。本書は西晋初期までに著されたと考えられるため、この部分は先秦名家に対する解釈として現存最古のものと考えられる。本書の佚文を相互に参照しながらその理論を分析し、司馬彪の理解にせまることで、郭象や魯勝に先行する西晋期の先秦名家の理解の一斑を示し、中国の論理学史における司馬彪の位置づけを探りたい。

I-4 「古易」は如何にして復元されたか——晁説之『古周易』を例に取って 藤田 衛（広島大学非常勤講師）

「古易」なる呼称は、『易』の形態に係する。『易』の内容は、経と伝に分けられる。経は、卦辞・爻辞のこと。伝は、孔子の作とされる『易』のいわば解説書、十翼を指す。その十翼は、象伝上下、繫辭伝上下、文言伝、説卦伝、序卦伝、雑卦伝の七種類、十部分で構成される。今本である王弼本は、その経と伝が渾然一体となっている。例えば、卦辞の次に象伝・大象伝が置かれ、各爻辞の後に小象伝が分配されているようにである。これが、「古易」すなわち「古い易」に対する「今の易」である。しかし、古くは経と伝とは別々に分けられていた。その経と伝が別行した古来の『易』の形を、「古易」と呼ぶのである。

いわゆる古易復興運動とは、今の経伝混淆の形ではなく、古い経伝別行の形を復元しようとする潮流のことである。その「古易」を復元しようとする機運は北宋に勃興し、以来、さまざまな形の「古易」が生み出された。

本報告では、数ある「古易」の内、晁説之が復元した「古易」に焦点を当てる。晁説之は、建中靖国元年（一一〇一年）に『古周易』を著した。その「古易」の特徴は二つある。一つは伝を上下に分けないこと、もう一つは文言伝の次に繫辭伝を置くことである。前者については、「いにしえでは竹簡は重くて大きいので、経を分けて二篇としたのである。今でまたどうして二篇として帙を成す必要があるのか」と、晁説之はその理由を述べている。しかし、後者については、何を根拠にその十翼の並び順にしたか言及しない。

そこで本発表では、晁説之が如何にして「古易」を復元したのか検討する。その結果、晁説之が復元した「古易」は、邵雍手写の百源『易』に依拠したものであることを明らかにする。加えて、その百源『易』は南北朝時代に遡りうる可能性を指摘する。

I-5 熊十力の「純粹カテゴリー」について——『新唯識論（語体文本）』第七章「成物」を中心に

胡 婧（日本学術振興会特別研究員）

熊十力（一八八五—一九六八）が一九三二年に刊行した『新唯識論（文言文本文）』は、近代的な自然科学への議論を織り交ぜているにもかかわらず、もっぱら大乘仏教の唯識論を俎上に載せて議論を展開していた。しかし、『新唯識論（語体文本）』（一九四四年）になると、カントやベルクソンなど西洋哲学の理論が頻出しており、文言文本文にあった「成色 [Cheng-se]」上・下章も近代の西洋的認識論を連想させる「成物」章に入れ替わっている。これは表面的には当時の西洋哲学に関する議論を吸収しただけのようだが、その背後には近代へと至る道に対する希求、すなわち近代以前のシンボルのひとつである旧来の唯識論を、近代化の色に塗り替える動機が存在している。さらに、彼自身の哲学理論においてもまた、認識の仕組みをより明白にさせることは新唯識論の基幹となす本体論からの要請でもあった。

上述の見方に基づき、本発表は二つの前提の上に議論を展開する。まず、熊十力の哲学におけるカテゴリー論の問題ないし認識論はすべて唯識という枠組みの下に置かれていることである。次に、その理論は、しばしばカントのカテゴリー論に対する議論のなかで展開されている。とはいえ、本発表で扱うカントの認識論に関する内容は、すべて熊十力の論考を理解するための一助であって、カントの認識論そのものを解釈しようとするものではない、ということである。

I-6 元朝における「聖旨焚毀諸路偽道藏經之碑」の全国頒布とその実態の考察

孔 詩（東京大学大学院）

元の世祖クビライは即位後、仏教に特別の尊崇と保護を加えることで、崇仏国家への移行を図りながら、道教についても全真教を優遇するに留まらず、玄教大宗師張留孫なども重用した。このような事情によつて、道仏二教の勢力図も時代の変遷と共に大きく変化するようになった。

至元十七年（一二八〇）、道士が僧侶を陥れようと放火するという陰謀が露顕した。それが導火線となり、道教側が占拠した多数の仏寺が未返還であつたという事情なども加わり、至元十八年（一二八一）に道仏討論会が改めて開催された。チベット僧や禅僧など仏教界の人間が多数参加し、道教界からも各派の最高指導者が出席した。論争は道教の經典の真偽を中心に展開されたが、憲宗朝に行われた討論会同様に道教側が敗北した。その結果、同年十月、憫忠寺において、道藏に収められている老子道德經以外の道教經典については焚書が行なわれ、討論会で決定された方針が実行されることになつた。至元二十一年（一二八四）、道仏確執の経緯と道藏偽經の焼却事情を記録した「聖旨焚毀諸路偽道藏經之碑」の碑石が建立され、その文書が全国各地に頒布された。「聖旨焚毀諸路偽道藏經之碑」は世祖が道教への絶対的統治権を保持することを喧伝し、さらに憲宗朝から世祖朝にわたる道仏抗争に関する公的な裁定を示すことで、その抗争に公式に終止符を打つたとされ、至元年間道仏二教交渉において重要な意味を持つている。

本発表では至元年間における道藏の焚經を再検討しつつ、これまで詳しい考察がなかつた、諸路にある道藏偽經を焼き捨てさせる聖旨の全国頒布と建碑等の政令の遂行状況を足がかりとして、地方に対して下された政策の実態を究明することを試みる。その上で、道教を弾圧するという方針が中央から地方まで貫徹されていたのかについて、新たな角度で明らかにすることを目的とする。

I-7 東晋元帝と後漢光武帝をめぐる礼議

板橋 暁子（東京大学）

西晋最末期の長安に成立した愍帝政権の存続期間はわずか四年であり、さらにその時期の大半は匈奴の漢朝との抗争に費やされていた。一方で愍帝は関中以外の地域の親晋勢力とも官爵の授与を通じて秩序形成を試み、一定の実質ある君臣関係を築いていた。長安が陥落し愍帝が捕囚されたあとも、愍帝の登極に対して各地から託された期待は劉琨「勸進表」において熱心に語られ、愍帝が没し司馬睿が登極した後も、東晋の礼制において一定の位置を与えられつづけた。

東晋成立後の太興三年、愍帝の宗廟祭祀をめぐる議論が起る。かつて愍帝に臣事していた元帝（司馬睿）は、愍帝を親祀すべきではないかと朝議にかけるが、太常の華恒は後漢光武帝建武十九年の故事を挙げ、愍帝は司馬睿の子の世代なので親祀の必要はないと説く。一方、劉琨の故吏であり劉琨の勸進の使者として南渡して以来司馬睿に仕えることになった温嶠は、司馬睿は愍帝に臣事した以上親祀すべきである、と説き、温嶠の説が採用される。

温嶠の説は、華恒の説の焦点である世代関係から議論をずらしており、また、光武帝が前漢最後の平帝に臣事しなかった事実と、光武帝が莽新の混乱期に軍事的功績を挙げて立身した事実とを恣意的に結び付けている。その論法によって、司馬睿は光武帝に匹敵するほどの大功は立てていない以上、愍帝に臣事した事実を無効にすることはできないものとする。本報告では、現状江南の主にすぎない司馬睿を、天下統一をほぼ完成させた時期の光武帝になぞらえようとした東晋朝廷の動き、それに異を唱えようとした温嶠の意図に焦点を当てるとともに、漢王朝と晋王朝それぞれにおいて嫡系が断絶した後に「中興」を実現したとされる後漢光武帝と東晋元帝が、東晋草創期そしてそれ以後の時期にどのように比較されたかを検討する。それにより、後漢と異なり天下統一を達成できなかった東晋が自らの正統を唱えるために必要とした論理を考察する。

I—8 東晋の貴族制と五等爵

渡邊 義浩（早稲田大学）

西晋「儒教国家」を形成した司馬氏は、曹魏の中で自己の勢力を拡大し、魏晋革命を起こすまでに、二つの大きな政策を実施した。第一は、州大中正の設置であり、第二は、五等爵制の施行である。州大中正の制は、曹氏の皇帝権力を再建するために「名士」の既得権を侵害した曹爽政権への反発を束ね、司馬氏が「名士」層の利益代表者として、曹氏の皇帝権力に対抗する手段として編み出されたが、司馬氏の権力が唯一無二の公権力として、あまたの私権力の上に屹立することを可能にするものではなかった。そこで、司馬昭は、併蜀の論功行賞を契機に五等爵制を施行する。五等爵制は、授爵者の郷品を二品以上に保障すると共に、公—侯—伯—子—男という階層制を備えた、国家的な秩序としての身分制である。貴族制を形成し、民爵を賜与される庶との間に身分制的な内婚制である士庶区別を形成する。同時に、司馬氏は、五等爵を超えた天子として正統化された。

西晋の五等爵制は、爵制的秩序による国家的身分制を形成し、州大中正の制とあいまって、世襲性を帯びた官僚制度の運用を生み出した。爵位は世襲が可能だからである。世襲性を帯びた官僚制度の運用という中国貴族制の属性は、西晋の皇帝権力の手により生み出されたのである。

やがて、国家的身分制として形成された西晋の貴族制は、八王の乱における五等爵の濫授により既存される。本報告は、東晋による、その再建を論ずるものである。

I-9 『論語』曾子三省章の朱注に関する再検討

莫 寒（北海道大学大学院）

従来、曾子三省章（學而篇）については、二つの争点がある。一つは「三省」についての訓詁論争であり、もう一つは「傳不習乎」の解釋である。本発表では「三省」のほうを取り上げて再検討する。

「三省」の「三」に対する解釋は、大まかに三つに分かれる。一つは朱注に基づく三者説であり、後の文章で言及された三事または三不（不忠不信不傳）を指す。一つは古注に基づく三度（みたび）説であり、三回（または何回も）の意味であり、再三・常に・何度もなどと訳されている。もう一つは『荀子』に基づく參省説であり、「三」は「省」と同義とし、參驗または省察の意を取る。

三者説では、朱注の「曾子以此三者日省其身」によって、『論語』經文の「三省」を「三つのことを省みる」のように読んでいる。本発表では、『論語集注』および『朱子語類』を確認し、朱子は果たして原文の「三」を「三者」と解釋しているのかどうかを再検討する。『朱子語類』によれば、朱子は「省」を過去への反省と解釋しないで、ただ「當下便省察」と解釋すべきことを指摘している。朱子にとっては、過去への反省より、現在の行動と正しい君子像とを対照することが重要なのである。その上、子張問行章（衛靈公篇）における「參」の朱注を確認してみると、朱子は『荀子』勸學篇の「參省」を意識して、「三省」を解釋している可能性が高いことが分かる。

さらに、この朱注をめぐって、後學がどのように朱注を理解したのかということについても注目する。例えば、朱子を批判する荻生徂徠の説と荻生徂徠に反論する懷徳堂學派の説とを検討してみると、朱注に対する上述のような解釋の争点が象徴的に浮き彫りになる。

I-10 臨江における十四世紀知識社会の発展——梁寅の道統論の受容を中心に

胡 華喩（東京大学大学院）

本発表では、元末明初期の臨江（いまの江西省樟樹市）における梁寅（一三〇三～一三八九）の道統論の受容を手がかりに、十四世紀江西地域における知識社会の発展を考察する。梁寅は、中下級の知識人階層出身で、独学で朱子学の新しい解釈を確立する。本発表では、梁寅の独自の学説が地方で広まり、当地の数多い科挙の名門にまで受け入れられたことを近世中国における知識社会の様態の一例として報告する。

先行研究では、科挙世家の発展は地域での教育連携を推進するのに繋がったことが注目されてきた。しかし、梁寅の事例によって新しい見方が提供できる。梁寅、字は孟敬、号は石門、「梁五経」と呼ばれる。『明史』では「世業農」と記され、泰州儒者の石光霽（一三六八～？）は彼についての「行状」で、「年十七、教小学於里中、始得『四書』・『書伝』・『詩伝』・『胡氏春秋伝』と述べた。梁寅は、生涯科挙に合格していないし、十分な蔵書も持っていない。薦挙によって朝廷による編纂事業に参加したものの、婚姻ネットワークによって有力な家系と繋がることはなかった。つまり、梁寅の特徴として、社会的に有利な背景がほとんどなかったことがあげられる。

梁寅の著作は数多いが、現在では十巻の文集しか残っていない。彼の文集には二つの特徴がある。まず、朱熹（一一三〇～一二〇〇）の道統論に基づき、「前聖授受之統」の延長線の上に、周敦頤（一〇一七～一〇七三）以前の「前聖」の系譜を掘り下げ、五経の伝承における「前聖」それぞれの役割と貢献を区別する。また、同郷の劉孟容（一一五一～？）の視点を朱子学を理解するための基準とすることが注目される。劉孟容は、字は公度、北宋劉攽（一〇二三～一〇八九）の玄孫であり、まず陸九淵（一一三九～一一九三）のもとで学び、のちに朱熹の弟子となった人物である。

本発表は梁寅の学問の受容を検討することで、十四世紀江西地域における知識社会に新たに「朱陸異同」を理解する可能性が芽生えたこと、そこから新しい知見を求める状況が生まれたことを指摘してみたい。

中国社会において姓氏とは、出自の表明や通婚範囲の制限など重要な機能を持つが、北朝時期においてはさらに独特な意義を持ち、従来多くの研究において扱われてきた。例えば、第一に北族の出自と正統性の問題で言えば、姓氏号は各部族指導者の祖先伝説に関連するものである。第二に漢姓と胡姓の問題で言えば、孝文帝による漢姓への改姓と西魏北周における胡姓への回帰は、政権の理念を表すものと理解された。第三に賜姓の問題で言えば、特に西魏宇文氏政権下で施行された賜姓策から、当時の政治状況や軍事制度の分析が試みられている。これらは相互に関連し、北朝の政治的志向を示すものと見られてきた。また別の方面では、北魏孝文帝による同姓間での婚姻の規制や、北周武帝による母氏族との婚姻の規制しており、婚姻規制を明確に定めたものとして知られる。

今回の報告の主旨は、北魏孝文帝、北周武帝らの婚姻制限令を軸として、そこで現れる姓氏の意義と親族意識を分析することにある。まず、それぞれ婚姻制限令が出された歴史的状況や、皇族高官たちの婚姻状況を集計する。特に武帝の場合、北齊滅亡という状況を加味するところに要点がある。そのうえで、各婚姻制限令の特徴や関係する宗族意識について、主に礼学面から検討する。彼らが理想とした「周道」、「周制」の内容やその理論的根拠も検討する。例えば「百世而婚姻不通」を周制として夏殷と対比する見方は、魏晋期においては決して一般的ではなかった。加えて従来あまり顧みられてこなかった北朝期の喪服議論にも着目し、母族の位置づけ等についても掘り下げる。

従来の王安石研究では、『字説』及びそれに関する「字学」は往々にして小学とみなされ、思想研究にとっての重要性が見落とされていた。本発表は王安石の研究において、『字説』や「字学」の重要性を再評価し、彼の独自の文字観や哲学的な背景を明らかにすることで、彼の学問の新たな側面を浮き彫りにすることを目指す。

本発表では、まず『字説』を概説し、それが単なる字書ではなく、形式的には『説文』の解字と『爾雅』の訓詁を兼ねており、本質的には文字に託された「窮理の書」であることを明示する。さらに「字」によつて理を窮めるのは、『字説』だけでなく、王安石の学問の多岐にわたつて顕著に現れていることを明らかにする。

次に、王安石の文字観を検討する。王安石の「不本六書、專取會意」という解字法は、従来「右文説」に関連づけて論じられてきたが、王安石の独特の文字観が看過されている。すなわち、漢字を意味のある各部品の組み合わせと見なす扱いは、易学の「設卦觀象」の思想に基づいていると考えられる。加えて、文字の起源について、彼は「字雖人の所制、本實出於自然」と論じ、字の形、音、義にはすべて「自然の理」が含まれていると考え、「字」を「自然の理」や「道」を示す形とした。

最後に、「字学」における哲学思想の根拠を考察する。王安石の文字起源論は、老子の自然論のようににも見えるが、実は「自然」の概念を拡大し、儒家の有為の思想を十分に肯定したのである。彼は「道の本末」なる概念によつて「自然」と「人力」を統合した。このような「道」を二分する論法は理学者の批判を招いたが、王安石の本意は、典章や名物などの人為的な制作に自然の理の根拠があるということにある。自然の理を肯定した上で、王安石は更に『周易』の「窮理盡性以至於命」という思想を老子の「為学」「為道」の解釈に取り入れている。「字学」の成立も、このような「窮理」の学の実践であると考えられる。

仁齋学、そして特に徂徠学は、近世日本思想史を前後に分かつ重要な分岐点であり、まさに儒学界を一変させた。実際に、徂徠学の与えた衝撃を受けて、考証学・国学・蘭学といった学問が次々とこれに続き、豊かな多様性に満ちた新たな時代が幕を開けたのである。しかし、こうした新たな潮流が生まれたのと同時に、仁齋学徂徠学によって一度克服されたはずの朱子学が新たな装いでもって復活を果たしたことも忘れてはならない。ではなぜ朱子学なのか。

本論では、寛政朱子学の尾藤二洲や古賀精里にとどまらず、さらには彼らが活躍する以前の、仁齋学・徂徠学の隆盛期に活動した高志泉溟という比較的無名の人物にも目を配って、彼らの宋明認識という視角から、先の問いに対する検討を行う。泉溟らは、朱子学を用いるか否かが国家興亡の鍵となると考え、宋明の歴史を参照しながら仁齋学・徂徠学をはじめとする「時学」が現実を与える危険性について警鐘を鳴らした。このような考え方は、寛政朱子学にも引き継がれ、広く共通認識として浸透した。松平定信の「数千載の下より程朱の徒いで、聖教をとなへ給ひければ、これにて論さだまり、また多くの年を経たれど、みな尊信ことにあつく、そのみちを用ひて国おこり、その道をうしなひて国亡ぶ」（『退閑雑記』）という言葉に示唆されるように、こうした認識が寛政異学の禁にも甚大な影響を及ぼし、その発令の理論的な根拠となったのである。

I-14 図譜の類書「三才図会」の編集と刊行——編集者の交代をめぐる 俞 昕雲（お茶の水女子大学研究協力員）

『三才図会』は、明代の王圻とその次男王思義によって編集された類書である。天・地・人の三才に及ぶあらゆる事物を、十四部類に分け、それぞれの項目に図を掲載し解説している。明代の社会生活や思想文化に関する豊富な図像資料を収録しているため、広く知られている。先行研究では、王圻の経歴や『三才図会』の基礎情報などを論じたほか、一部の図譜を取り上げて考証や解説もしてきた。

本発表では、『三才図会』が草創から出版までの過程に注目する。『三才図会』は父子二代にわたり、思義が一人だけで十年以上の時間をかけて完成させた。圻は進士出身の官僚であり、刑獄、海防、水利、塩務など、政務に関する実用的な書籍を編刊したことが多く、資料の整理や類纂に優れている。一方、思義は科挙に失意した士人であり、編刊した書籍は主に文学や絵画に関するものであった。父子二人の社会的立場や学術的関心が異なるため、編集者の交代とともに編集方針も変化したことは容易に想像できる。

『三才図会』の編集の背景を理解した上で、圻と思義がそれぞれに編集した部類の文献的特徴を分析する。図譜・図説の出典を考察することで、彼らの編集方法が明らかになる。圻は自分の学問に基づいて資料を選び、蒐集した図譜には宋元時代に登場した図面が多く見られる。思義は『三才図会』の内容を最大限に充実させようと努め、明の文人が編集した叢書や類書を利用し、他人の書物をまとめて採録したことが多くあった。

また、『三才図会』の刊行に関する現存資料は少ないものの、当時の記述や同時期に出版された書籍から、出版の経緯を推測することができる。現在では全一〇六巻の大著として扱われているが、当時は部類ごとに分けて出版され、一部類が独立した書物として扱われていたことがあった。このように、『三才図会』の編集と刊行の過程を深く探求することで、明代の文人たちの知識収集と分類の活動を垣間見ることができる。

井澤 耕一（茨城大学）

一九世紀末から二〇世紀初頭、前半にかけて、中国の学者、特に革命に関わった者たちによる「経学史」「中国史」に関わる著作が、「教科書」の形式により陸続と発刊された。例えば、「経学史」では、劉師培『経学教科書』（一九〇五年刊）、皮錫瑞『経学歴史』（一九〇六年刊）、時代は下るが馬宗霍『中国経学史』（一九三六年刊）が主なものである。また中国史の「教科書」では、夏曾佑『最新中学教科書 中国歴史』（一九〇四〜六年刊）、劉師培『中国歴史教科書』（一九〇五〜〇六年刊）が挙げられよう。

これまで発表者は、前述の著作の訳注作成にかかわってきたが、その過程で気づいたのは、劉氏以下の経学者および彼らに関係した人々の出身地や活動地域が、長江の中・下流域周辺、すなわち湖南、江蘇、上海、浙江の各地域であったこと、その著述の作成および普及に際して、明治期以降の日本および日本人が広く関与していたことである。皮錫瑞・馬宗霍は湖南、劉師培は江蘇省揚州、夏曾佑は浙江省の出身であったが、彼らと所縁のある人々も長江流域出身者が多く、例えば、学術的立場を異にしていた劉氏と夏氏の遺稿は共に浙江出身の銭玄同の手によって整理されている。また在朝、在野を問わず、内藤湖南、狩野直喜、本田成之、諸橋轍次、倉石武四郎、吉川幸次郎、竹添進一郎、松崎鶴雄、後藤朝太郎、宗方小太郎などの日本人たちが、直接の面会、文通、または著作の閲読を通して、彼の地の学者との学術的交流を図っていたことも看過できない。

今回の発表では、中国の学者たちの著作、日記、尺牘、年譜、日本人の著作、日記、旅行記などを詳細に検討した上で、経学・歴史研究史を軸に、近代、長江流域において成立・展開した学術の実相と当時の日本における中国学との邂逅を明らかにする。

II 文学・語学部会 (A)

II A-1 楚辭に於ける「対天」表現

木村 剛大 (國學院大學非常勤講師)

楚辭は天の描写に富む。篇名に天を冠す「天問」以外にも、「離騷」「九歌」「九章」をはじめ、幾篇にも天の描写が確認される。本発表では、楚辭各篇や楚辭と同時代の文献の「対天」表現の様相を確認することで、その相違を指摘したい。「対天」表現としたのは、天とは何かという検討ではなく、天への対応や対処に関わる表現を検討するためである。例えば「離騷」の「対天」表現には、「指九天以爲正兮」や「皇天無私阿兮」のように、靈均が天を絶対的基準とする例が看取される。この例は、靈均が現実の不条理に対して懊悩する根拠となると捉え得る。この懊悩が「離騷」に現れる「孤独」へと連なるのであれば、「離騷」の「対天」表現の検討は、「離騷」に於ける「孤独」の分析ともなり得よう。その一方で、天の絶対性がかげり、天への懷疑が表現される例が他篇には確認される。以上のような、「離騷」とは異なる「対天」表現にも分析を加える。特に本発表では、「離騷」にみる「対天」表現の特性の指摘を主な目的としたい。そのために「離騷」の「対天」表現と、楚辭他篇や他文献の「対天」表現の比較検討を試みる。この検討によって、「離騷」にみられる強烈な「孤独」が、「対天」表現という一面からも捉え得ることを指摘し、楚辭他篇や同時代文献の「対天」表現と比較した際の、「離騷」の「対天」表現の独自性についても少しく言及したい。

II A-2 六朝文人における「懶」の諸相

林 暁光（大阪大学）

「懶（怠けるさま）」は普通、悪徳として否定的に捉えられていよう。だが、事情はそれほど単純ではない。文人にとっては、ある種の理想的な状態として積極的に捉えられる場合も少なくなかった。本発表は、六朝期の文人社会における「懶」の諸相について、その歴史的な変遷を視野に入れながら検討するものである。

六朝期における「懶」は、一言で概括するならば、何者かとの対抗関係・緊張関係のもとに表現されたと言つてよい。この点において、まず注目すべきは魏・嵇康「与山巨源絶交書」である。ここで嵇康は自らの「懶」を二種類の緊張関係において捉えている。一つは、身体的な緊張関係。嵇康は「懶」なる生活により、身体の汚れや疾患に悩まされたが、それを敢えて改めようとはしなかった。もう一つは、政治的な緊張関係。官界との間に軋轢を来した嵇康は、官界を去るための理由として「懶」なる態度を選んだのである。

嵇康に見られた「懶」の二つの緊張関係は、その後の文人たちにも受け継がれてゆく。例えば、身体的な緊張関係については十彬・劉瓛などに、政治的な緊張関係については江総や盧思道ら名門貴族たちに受け継がれてゆく。だが、彼らの作品に表現された緊張関係には、「貧」・「病」・「拙」などの要素が加えられ、「懶」の相対化とも呼ぶべき傾向が見て取れる。また、名門貴族たちの「懶」には次のような側面も見られた。彼らは、現実には高雅な生活を送っているにもかかわらず、敢えてことさらに自己を「懶」なる存在として表現した。それによって、自己の優越を誇ろうとしたのである。ここに見て取れるのは、現実の自己と作品に表現された自己との間に生ずる緊張関係とも呼ぶべきものである。

六朝期以後、杜甫や白居易は「懶」なる自己を表現した文人であるが、彼らの作品は六朝文人に見える「懶」の緊張関係を次第に脱却してゆく。六朝との比較において見るならば、極めて興味深い展開と言えよう。

II A-3 六朝隋唐期の雨乞いにおける僧侶像の変容——身体毀損と身体復元モチーフを手がかりに

張 禧睿（名古屋大学大学院）

中国仏教の基盤が築かれた六朝隋唐期において、仏教僧侶が雨乞いを実行した記録は、当時成立した仏教文献の中に収録されている。雨乞いを実行したのは主として君主、官僚、巫覡等であった。その一方で、僧侶は誦経をはじめとする儀式によって、仏教の立場から雨乞いを実現させた。僧侶の行為が特別な意味を持つため、『法苑珠林』『祈雨篇』などに見られるように、仏教書の編纂者の手で載録されたと推測できよう。本発表では、梁・慧皎『高僧伝』、唐・道宣『続高僧伝』、唐・道世『法苑珠林』に収録された僧侶伝記および仏教説話のテキストを取り上げ、身体毀損・身体復元モチーフを手がかりに、六朝隋唐期の雨乞いにおける僧侶像の変容を明らかにしたい。

身体毀損・身体復元モチーフとは、人が身体のある部分を切り離すという話型、および身体が毀損されたあと、生命力を損傷せずに元の状態に復元するという話型である。従来の研究は、仏教思想に焦点を当てて、僧侶の身体毀損を捨身行為として捉えている。しかし一方で、雨乞いに繋がる身体毀損および身体復元こそが、僧侶の文学的表現を構成する独特な要素となっていたのではないだろうか。

本発表は、具体的には三つの視点から考察を進める。第一に、雨乞いに効く誦経を比較対象として、僧侶の身体毀損・身体復元が持つ独自の役割を示す。このとき特に、誦経、身体毀損・身体復元、両者の共存という方面に注目する。第二に、僧侶の身体毀損・身体復元が行われた場所について、仏堂、道場への言及に注目し、史書、方志の記載を検証しながら、場所に潜んでいる文化的背景を検討する。第三に、僧侶伝記、仏教説話が共に載せる類似記事を比較しながら、それぞれの取材意図および表現特徴の異同を探求する。また、雨乞いの効果に対する他者からの賛美、その反面にある身体観の論争を切り口として、テキストに描かれた僧侶像の複雑な諸相についても論じてみたい。

II A-4 王維と「桃花源」——典故に応答すること

早川 侑哉（東京大学大学院）

詩人が典故を用いる時、出典のいかなる部分・性質に注目し、そこからいかに独自の表現へと展開させるのであろうか。王維の弱年の歌行「桃花源」は、陶淵明「桃花源記（并詩）」を典拠とするが、特に「記」の末尾の、桃源への再訪が不可能である、というモチーフが典故利用の核となっている。それ以降の王維詩における「桃花源」受容を追うと、この再訪不可能のモチーフがさらに展開されて詩を構成するさまを見て取ることが出来る。例えば、「藍田山石門精舎」詩では再訪時の失路を恐れるゆえに「明發には更に登歴せん」と説き、「桃源の人」に來春の訪問を約束して帰ろう、と述べる。また、「終南別業」詩では、再訪不可能のモチーフを反転して、山中の理想郷への永住を説くに至っている。

「桃花源記」自体については長い研究史がある。再訪不可能のモチーフと、「仙郷談」や「洞窟探訪説話」といった説話類型との関係も、小川環樹氏や内山知也氏らの指摘があり、桃花源が仙境か田園か、という場の性質の問題なども関わって論じられてきた。

唐詩における桃源故事の受容については、松本肇氏の研究等があり、「桃花源記（并詩）」と王維「桃源行」との関連性に限っても、既に複数の論考がある。先行説を再整理すれば、概ね、唐詩における桃源表象は中唐期を画期として仙境・別世界への憧憬から離れるという理解が導き出せる。そうした史的展開の中で、王維詩における桃源表象は六朝志怪の仙境に連なるものと考えられてきた。

しかしながら、桃源故事の利用が、いかに王維の詩の世界を作り上げることに寄与しているのかという観点からすれば、再訪不可能のモチーフへの、言わば変奏による応答が繰り返し試みられていることは、王維詩の典故利用の手法の独自性を示す例だと言える。本発表では、それが独り「桃花源記」受容にのみ限った事ではなく、盛唐詩人たる王維の作詩全般に通じる戦略であることにも論及したい。

II A-5 唐代以前の小説中の山のイメージの変化

唐 鉦（立命館大学客員研究員）

本発表では、唐代以前の諸文献に見える山のイメージの変化について、そしてそれが当時のどのような思想と関連しているのかについて検討する。唐代以前の文献においては山に関する物語が多く現れ、そのイメージは時代とともに変化している。本発表は志怪小説集を中心とする唐代以前の諸文献を整理し、その変化を明らかにする。

具体的にはまず、神仙が住む山の位置が、遠い場所から現実世界の人の身近な場所へと変化した。『山海経』『神異経』などの早期文献では、神仙がいる山は基本的に現実世界の人が辿り着きにくい所であった。しかし後漢末の『列仙伝』に至ると、身近な山で仙人に会う物語が多くなり、仙人のいる場所と現実世界との距離が急速に縮まった。遠い山のことを記す物語は、南北朝時代になるとほとんど現れなくなる。つまり山の位置の変化は、後漢末期から始まり、魏晋を経て南北朝時代に完成したと言える。

また魏晋時代から、山のイメージにもう一つの変化が現れる。それは山が現実世界の空間から異界へと変化したことである。東晋『拾遺記』において初めて山中異界の物語が現れ、南北朝時代になると、『搜神後記』『幽明録』『異苑』などの志怪小説集に山中異界の物語がさらに出現している。注目すべきなのは、早期の山中異界の物語では、洞窟という要素が基本的に含まれ、その中の一部は山中の穴中異界の物語であり、後には洞窟という要素はしだいに消えていくが、しかし物語のストーリーはほとんど変わらないことである。つまり穴中異界における出来事は、洞窟から離れて山中異界で発生するように変化していくのであり、山中異界は穴中異界から発展してきたと考えることができる。この傾向は唐代伝奇小説にも継続されて発展し、唐代伝奇では山中異界の物語が主流となっている。こうした山中異界の物語が出現し、変化していく背景に、当時流行していた洞天思想の影響があったことを検証したい。

II A-6 唐詩における楊貴妃像の推移と発展

劉 孟磊（神戸大学大学院）

楊貴妃は絶世の美女として唐詩のなかに描かれているが、皇帝の寵妃という特殊な身分であることもあり、その描写の方法については様々な試みがなされた。本研究は影響力ある詩人であった李白・杜甫・白居易・張祜の四人による楊貴妃を詠んだ作品を中心とし、それぞれの作者における微妙な違いを、先行研究を適宜参考にしながら分析したうえで、盛唐から中唐にかけての詩人はどのように楊貴妃像をつくりあげたかを考察する。

まず李白は、楊貴妃に関連した応制詩のなかで、玄宗の独占欲と虚栄心とを満たす描きかたをし、自然の物象と、女神の伝説とを用いて美しさを暗示しつつ、容姿と才芸とを大いに称え、娯楽作品としての機能を果たすものを作りあげた。

つぎに杜甫は、楊貴妃に対して「西王母」のイメージを用いて尊重を表すが、その魅力の危険性を強調し、批判的な視点によって官能性を抑えつけている。更に肅宗にむけて詠んだ詩では傾国の悪女に喩え、内廷で隠れて行なう「秘戯」にさえも言及する。

また白居易は「長恨歌」によって、虚構的物語の仕組みによって大胆に楊貴妃の身体を覗き、官能性を新しい次元にまで高めた。その一方で、神性を備えた斬新な「死後の楊貴妃像」を作り、感情の交流ができる精神性と愛情とを与え、単純なる官能性を超克した。

最後に張祜は、宮廷の裏話にまで積極的に踏み込んでいる。「生前の楊貴妃」の倫理的問題を暴露する一方、温もりが感じられるような身近な存在として詠みこみ、より強い能動性と感受性を備える「死後の楊貴妃」を作った。

全体的に見れば、天子に対応する位置づけや死後の在り方を意味している「神性」と、玄宗に対する役割および感情交流の相手としての捉え方を象徴する「人性」は、楊貴妃像の表と裏とを構成している。両者の相互作用により、唐詩における楊貴妃像は次第に多面的・立体的になったといえる。

II A-7 魚玄機の詩に見られる「風月滿庭」

王 若冲（岡山大学大学院）

晩唐の魚玄機（約八四三〜八六八）が好んだ詩の題材として、月が挙げられる。詩人の全詩数に対する月が登場する詩の割合は、魚玄機の場合33.0%であり、同時代の女流詩人の薛濤（約781%）・李冶（約33.5%）・花蕊夫人徐氏（約10.1%）と比べて高くなっている。また、彼女が月を詠じる詩には、独創的な表現がしばしば見られるが、魚玄機の詩における月に関する先行研究は見当たらないようである。

そこで、発表者はこれまで、魚玄機の月にまつわる詩語について研究を進めてきたが、今回は「秋怨」に見られる「風月滿庭」という表現をとりあげたい。

自嘆多情是足愁

自^{みづか}ら嘆ず 多情は是れ足愁なるを、

況當風月滿庭秋

況んや 風月滿庭の秋に 當たるをや。

洞房偏與更聲近

洞房^{ひと} 偏へに 更聲と近し、

夜夜燈前欲白頭

夜夜 燈前に 白頭ならんと欲す。

「風月滿庭」は、魚玄機が初めて用いた表現と考えられるが、彼女は以前のどのような表現に基づいてこの表現を工夫したのか、またこの表現はどのように後世に受け継がれていったのか、この二点は研究に値すると思われる。従来、この詩については、主に孤独な女性の感情表現の面から評価されるのみであったが、本発表では、「風月滿庭」に関連する前の時代と同時代の詩詞における用例を検討して、この表現が生み出された経緯について考察し、さらにこの表現が後の時代の詩詞に与えた影響について論じてみたい。

II A-8 花蕊夫人の「宮詞」における宮廷女性の表象

ガイ・ホツブス（大阪大学大学院）

「宮詞」は、宮廷生活等を詠ずる七言絶句の詩である。中唐の王建（？～八三〇）「宮詞」百首に始まり、五代蜀の花蕊夫人（八八三？～九二六）や北宋の王珪の作などがそれに続いた。本報告では、このうち花蕊夫人の作に着目する。花蕊夫人の「宮詞」については、北宋の陳師道が「王建に効ならぬ宮詞百首を作る」と述べるように、王建の「宮詞」を継承したとする見方が行われてきた。花蕊夫人「宮詞」の独自性とはどのようなものであったのか。王建「宮詞」との比較・検討を試みたい。

「宮詞」において最も中心的な題材となるのは宮女（宮廷女性）、すなわち宮中奥深くに暮らし、帝王に侍る女性たちである。王建と花蕊夫人の「宮詞」を分析するにあたって、本研究では特に〈宮女と馬〉、〈宮女と花〉、〈宮女と天子〉の三つのモチーフを取りあげ、その表現の仕方に着目する。三つのモチーフの表現について王建の作と比較することにより、花蕊夫人「宮詞」における宮廷女性のイメージには次のような特徴が見られることが明らかとなった。すなわち、〈宮女と馬〉について言えば、宮廷女性はより女性的に表現され、〈宮女と花〉について言えば、樂しみ・喜びを能動的に享受する存在として表現され、〈宮女と天子〉について言えば、積極的・自発的に振る舞う存在として表現されている。等々。総じて、花蕊夫人の「宮詞」には、宮廷女性の愛らしさ・活発さ・賢さ・好奇心にみちた様子などが生き生きと多面的に表現されていると言えよう。

以上の検討を踏まえて、本報告では更に花蕊夫人「宮詞」全体の文学史的位置づけについて、彼女が生きた時代の歴史的な背景をも視野に入れながら若干の私見を提示してみたい。

李白が玄宗に召された際、「道の義」の修養がこれを導いたと、親しく御詞をたまわった。李陽冰「草堂集序」に「卿是布衣、名為朕知。非素畜道義、何以及此」。また李白は天宝元年「高道（不仕）」挙、同三・四載「高蹈不仕」挙に応じた楊山人と岑徵君に宛てて、それぞれ「片言道合唯有君」「貴道皆全真、潜輝臥幽鄰」と述べている。両挙は道の体現を地でゆくひとを求めたもの。「道の義」とは何か、「道合」とはどのようなことか。これらは『道德経』玄宗御注により確認することができる。岑徵君の道について「探元入窅默」道の奥深いところをさぐってゆくと、『道德経』第一章「玄之又玄」、第二十一章「道之為物、唯恍唯惚」等を想起させる。これら道をめぐる言説は自身の徵召という特殊な条件のもとで、唐朝の公式的な見解を反映してなされたものとみなされる。それでは李白のへいぜいにおける道の言及とはどのようなものか。顕著な例は仙遊の詩に見られる。仙界への心の旅を描くなかで、服薬その他、道家の術により道を得ることを言うものである。開元期、道士を対象に、焦鍊士の道が胎息絶穀・服薬鍊魄など、具体的な方法とともに語られる。胡紫陽について、呼吸法や服薬・鍊気の術が言及される。天宝期、自身の受籙を契機として、成道の過程が述べられる。高天師如貴から道を授けられた道士蓋寰が、内丹術によって白日昇天を観想するさまが言われる。晩年には、自身の成道が「琴心三疊」心を三丹田に和する方法とともに語られる。また工程の詳細が、時期は確知できないが「大還を草創す……」という題の詩に語られる。徵召により道は個人の内面のみの問題ではなく、対社会的な意味合いを帯びたであろう。かくて折に触れたかまつた道への意識が、受籙を機に自身の道をより深く探求する言辞として、「草創大還……」や「廬山謠……」に結実してゆく。そのように捉えることができる。

II A-10 李紳の詩文における儒家的文学観

席暢（慶應義塾大学大学院）

李紳の詩は自ら編集した『追昔遊集』と『全唐詩』に収められ、百四十首ほどが現存する。李紳の文章は十四篇しか残っておらず、『全唐文』や『文苑英華』に収められている。李紳は白居易、元稹とともに論じられることが多く、一般的に中唐新楽府詩の中核を担った詩人として認識されているが、彼の新楽府二十首は全て散逸してしまったため、その内容を確認することはできない。しかし、彼の新楽府詩創作の動機や背景などは他人の文章や詩の中から多少は窺い知ることができる。新楽府詩の精神とは、『詩経』および漢の古楽府詩のように政治・社会を反映すべしとする儒家的文学観である。李紳の散逸した新楽府詩はともかくとして、現存する徒詩の中にはその種の文学観が見られる。つまり、それらの詩は新楽府詩ではないものの、新楽府の精神を持つと言える。白居易の詩を例とすれば、「秦中吟」十首を代表とする一連の儒家的精神を持つ諷諭詩は『白氏文集』の巻一と巻二に分類され、巻三と巻四新楽府詩の類ではない。李紳も同じように、新楽府以外の詩にも儒家的文学観を持つ詩を作ったと考えられる。また、李紳の現存する十四篇の文章の中にも、儒家的な文学観が見られる。先行研究において、李紳の詩と文章における儒家的文学観に言及したものは存在する。例えば、嚴正道氏の『李紳及其詩歌研究』（中国社会科学出版社、二〇一九年）は、一部の詩と文章に見られる儒家思想を論じている。しかしそれらの研究は李紳の詩文における儒家思想を一つのまとまりとして深く考察したものではない。李紳は中唐新楽府詩を担った詩人の一人であるため、彼の作品における儒家的文学観を全面的に考察する必要性と意義は、極めて高いと考えられる。本発表では、李紳の儒家的文学観を持つ詩と文章を全体的に考察することによって、李紳の文学観の諸相を探究していく。

II A-11 「有力」と「無意」——中国の詩学における風と水のイメージをめぐる

浅見 洋二（大阪大学）

優れた文学作品には、容易くは言葉として表現できないような「何か」が備わっている。文学の魅力は、その「何か」にこそ存すると言つていい。「何か」とは何か。古くから文人たちは、それを言葉にあらわそうと努めてきた。そのとき彼らが用いたのは、事物のイメージ (image) を比喻として用いる手法である。なかでも最も多く用いられたのは風と水、もしくはそれに関連する事物のイメージであろう。晋の陸機「文賦」に「思風 胸臆に発し、言泉 唇齒に流る」とあるのは、その代表的な例のひとつである。

文人たちは風と水のイメージによって何を論じようとしたのか。第一には、文学に備わる「力」であつたと言えよう。例えば、唐の李白が「筆を落とせば風霜を廻らす」、杜甫が「詞源 倒に流す 三峽の水」と述べるのは、壮大で力強く、激しく苛烈な風と水の比喻によって文学の「力」とそれがもたらす動き・変化を可視化しようとしたものである。この種の風と水のイメージは、その後も広く受け継がれ、天地や鬼神を動かす超人的な「力」、あるいは万物に恐怖を与える凶暴な「力」、いわば言葉によるテロルとも結びつけられてゆく。

ところで宋代には、右とはやや異なる性格を帯びた風と水のイメージも多く行われるようになる。北宋の蘇洵が『周易』渙卦・象伝の「風の水上を行くは渙なり」を文学に当てはめて論じて以降、蘇軾らを経て広まる風と水のイメージがそれである。自在に動き、無礙に形を変える風と水の比喻によって、文人たちは「無意」、換言すれば作者の意図による制御を超えたところで機能する文学とそれが生み出す「自然」なる美を論じようとした。

本報告では、文学論に用いられる風と水のイメージの系譜をたどることで、六朝から唐を経て宋へと至る中国詩学に広く潜在するふたつの類型、すなわち「力」の詩学と「無意・自然」の詩学との関係の諸相、およびそこに認められる文学観の特質について考えてみたい。

II A-12 唐汝詢『唐詩解』の出版過程とその選詩基準

陳 禕璇（九州大学大学院）

明の唐汝詢（一五六五～一六五九）は松江府華亭県（現上海市松江區）の人である。彼は僅か五歳で両眼の光を失い、家族の助けで、音読により学問を修め、唐詩選集の『唐詩解』を編纂して、出版した。無位無官でしかも盲目の唐汝詢が、なぜ『唐詩解』五十巻を出版することができたのか、どのようにして『唐詩解』の原稿を完成させたのか、それらに関する研究は日中を含めて未だ非常に少ない。

本発表では、唐汝詢の詩文集『西陽山人編蓬集』・同『後集』、及び口述筆記『西陽舌瑣』を取り上げ、その自述から、『唐詩解』の出版過程と唐汝詢の文学活動について考察したい。

『唐詩解』の評価について、例えば清代の『四庫全書總目提要』では、「是書取高廷禮『唐詩正聲』、李于麟『唐詩選』二書、稍為訂正、附以己意、為之箋釋。」とあるように、『唐詩解』は高棟、李攀龍の選集に基づいた亜流の書物であるという指摘があり、しかも、その注釈については、「所注實多冗蕪、不盡得古人之意、亦不盡得其所出。」と不十分なものであるとの断が下されている。

しかし、『唐詩解』には、実際に一五四六首の唐詩の名作が選り取られ、上述の高棟『唐詩正聲』、李攀龍『唐詩選』（また高棟の『唐詩品彙』も含めて）のほか、独自に選り出した作品も多数含まれている。

今回の発表では、特に李白、杜甫、王維、そして中唐の白居易を加えた四詩人の作品を中心に、唐汝詢の選詩基準とその出典（盲目の彼は自由に唐詩の別集等を読むことが出来ない）について検討したいと思う。また、先に述べた通り、「冗蕪が多い」とされたその注釈についても、考察し得たところを紹介したいと考える。発表者の所見では、この唐汝詢『唐詩解』は『四庫全書總目提要』の酷評に反して、清代の唐詩学にかなり大きな影響を与えているように思われるからである。

II A-13 「文学」の一形態——葉小鸞の作品をどう読むか

早川 太基（神戸大学）

明末の江南の葉小鸞（一六一六～一六三二）は、類まれなる美貌と悲劇的な死、そして何よりも文学的才能によって知られる。本発表では先行研究を参考にしつつ、葉小鸞の文学的特質について総合的に論じてゆく。

まずは家庭環境について見てゆこう。葉小鸞は、文人の葉紹袁（一五八九～一六四八）と、才女の沈宜修（一五九〇～一六三五）との間に生まれた第三女であり、弟には『原詩』で名高い葉燮（一六二七～一七〇二）がおり、一家の創作した詩文は『午夢堂集』にまとめられる。検討せねばならないのは、葉小鸞の死をめぐる問題である。葉小鸞は婚姻を目前にして十七歳で病死したが、沈宜修による伝記「季女瓊章伝」では死亡に関する記述に書き直した痕跡があることから、先行研究では自然死か否かが疑われてきた。同文における死後に神仙となったという叙述の表現方法も含めて、再検討を試みたい。

次に葉紹袁がみずから評語を付して刊行した葉小鸞の文集『返生香』の芸術的世界について、自己の超越への希望や、移り変わりゆくものへの興味などの角度から分析を加える。分析の範囲は、葉小鸞自身の作品のみに留まらず、ほかの家族や、同時期の江南において流行していた作風をも含めて検討する。さらに陳維崧の編纂した『婦人集』や、陳廷焯『白雨齋詞話』など清朝の詞人における高評価の理由について、時代の好尚という問題も含めながら探つてゆく。

総じていえば葉小鸞の文学的特質は、自身の文筆によって醸しだされる芸術的魅力のみに止まらない。その作品世界には、家庭の団欒や、突然の夭折ののちに神仙となったという神秘的な伝承、ひいては明朝の衰亡という家国の悲劇が、自然と投影される仕組みになっている。つまりは「葉小鸞」という人物が、ある種の神話としての枠組みを形成し、その作品の享受と一体化し、行間に深みが生まれ、言外の情を増大化させているのは、これもまた「文学」のひとつの形態と言える。

II A-14 傍観と好奇——『明史・列女伝』の書法

葉 宇軒（東京大学大学院）

近年、文学においても歴史学においても、明代女性史は最も注目されている領域の一つである。中でも『明史・列女伝』（以下、『列女伝』と称す）は最も重要な文献と言えるが、多くの先行研究は伝記のプロット、作者の意図、類似したテキスト（忠臣など）との比較等々にポイントを置いていく。言うまでもなく、「文」を介さなければ、「史」は形にならない。伝記文献を分析・解釈する際には、作者の意図や社会的文脈の他にも、特定の時代における「書写」（書きぶり）の慣習と方法——書法がテキストの成立過程にどのように機能したか、精密に検討する必要があるだろう。

明末期の戦争に関する記録の中で見れば、史可法などの男性忠臣の伝記とは大きく異なり、『列女伝』の編纂者は伝記の対象とは距離を置き、傍観的かつ評論的な態度・書法を用い、女性死者の人数を計算し、その「死志」を語る。こういった特徴的な俯視の視線は、テキストの形態に決定的な影響を与えているが、その一方で、「奇」に対する異常な執着も注目に値する。編纂者は『列女伝』において「殉節」の記述に熱中し、又は「残酷な死」を積極的に取り上げる。こうした物語への偏愛は、明末清初の道徳厳格主義と晩明以降の「求異蒐奇」という風潮と深く関連すると思われる。

パラドクシカルに言えば、「奇を奇として表出する」ためにこそ、前述の「距離を置く」という書き方が必要なのである。『列女伝』において、「好奇」と「傍観」という「書写」の方法は、倫理道徳に対する「極端な賛同」でありながら、社会通念に対する挑戦でもあった。本発表は、こうした視点から、『列女伝』というテキストに特徴的な形貌と方法を解明・分析し、新たな位置づけを試みるとともに、より深い理解の提示を目指すものである。

II A-15 趙翼の「汪文端公挽詩一千字」について

汪 洋（九州大学大学院）

清中期の文人趙翼（一七二七—一八一四）には、百韻一千字に及ぶ長大な五言排律がある。『甌北集』巻六に収められる「汪文端師歿已数月、每欲一述哀情、卒卒未暇也、輟直枢曹、閑居無事、甫得和淚漬墨、以詩哭之、凡一千字（わが師文端公の汪由敦が没して已に数ヶ月、哀情を述べようと思いつつ、多忙でその暇がなかった。枢曹に宿直する任を解かれ、閑居無事となり、初めて涙をしぼって墨をすり、詩を以て之を哭す、すべて一千字）」である。以下、「汪文端公挽詩一千字」と略称する。

趙翼はその青年期は苦勞の連続でなかなか功名の糸口をつかむことできなかったが、乾隆十五年（一七五〇）秋に順天府の郷試を受験し、座師の汪由敦に認められ、やがて軍機大臣でもある彼の推薦によって、乾隆二十一年（一七五六）軍機処に入り、その章京（事務書記官）として乾隆帝の側近となる榮譽を勝ち取ったのである。しかし乾隆二十三年（一七五八）正月、汪由敦は病没。庇護者を失った趙翼は当然にして軍機処を去らねばならなかったのだが、このような状況の下に詠じられたこの挽詩は、恩師への追悼の心情はもとより、さらには自己の不安定な現状についての内省も書き綴られているのである。

一般に趙翼の生涯と文学についての研究は、乾隆三十八年（一七七三）母への孝養のために官界を去った後の著述活動に注目が集まり、青壯年期の趙翼についての考察は未だ十分ではない。詩人および文芸批評家としてはまだ萌芽期と言える段階であるが、現在『甌北集』に見える彼の最長篇のこの挽詩を通して、その詩学についての基本姿勢や、また当時の北京詩壇からの影響などを様々に考えてみたい。

II 文学・語学部会 (B)

II B-1 「傍観者」の大学叙事——老舎『趙子曰』における理想と現実

小川 主税 (大阪大学大学院)

二〇世紀の中国文学史を振り返ってみると、大学生生活を題材とした作品が数多く存在することに気付かされる。盧隱『海濱故人』(一九三三)、鹿橋『未央歌』(一九五九)、劉素拉『你別無選擇』(一九八五)など、男女学生の青春時代を描いた小説は枚挙にいとまない。これらの作品には、作家自身の学生生活に取材した描写を少なからず見出すことができる。たとえば『未央歌』には、西南聯合大学在学時における鹿橋の見聞がふんだんに盛り込まれている。中国の大学叙事のほとんどは、当事者の経験に基づく自伝的な側面を有していたと言ってもいいだろう。

このような中国の大学叙事の系譜において、注目すべき位置を占めるのが老舎(一八九九—一九六六)の長篇『趙子曰』(一九二七)である。一九一八年に北京師範学校を卒業した老舎は、貧困のために大学進学の夢を諦めざるをえなかった。そうした境遇にあつた老舎は、五四運動当時の学生生活に対して自らを「傍観者」として認識したうえで、一九二〇年代前半の北京の下宿屋に暮らす学生の一群を『趙子曰』に描いてみせたのである。

『趙子曰』は、名正大学の学生・趙子曰が大学紛争を首謀した科で退学処分を言い渡され、学友を頼りに新たな生活の道を探し求めるも、ここごとく挫折してゆくさまを描く。目先の小事にばかり拘泥する趙子曰ら男子学生は、自由恋愛の実践を夢見ては失敗し、国民国家の建設を志しては無念の死を遂げる。『趙子曰』には、五四以降の近代的思想を享受しながらも、生々しい現実に直面せざるをえない男子学生の姿がアイロニカルに戯画化されているのである。こうした描写は、五四運動を経験した作家の筆になる同時代のほかの大学叙事と比較しても類を見ない。以上を踏まえて本報告では、「傍観者」としての意識のもとに執筆された『趙子曰』の精読を通じて、同小説に描かれる理想と現実の相克の様相について若干の私見を述べてみたい。

新文学団体「創造社」の設立メンバーであった張資平（一八九三—一九五九）は、数多くの恋愛小説を量産したベストセラー作家であった。一九一二年から一九二二年まで日本に留学した張は、初期には日本留学生活を中心のテーマとすることが多かったが、恋愛や婚姻を主題とする作品も執筆していた。特に帰国後、張資平は三角恋愛等の恋愛小説に中心を移し、通俗小説に路線変更したと言われる。その中でも『梅嶺之春』は、複数の社会問題を提供した代表作として高く評価されており、単なる恋愛小説として片付けることはできないものだ。本作品は童養媳（息子の嫁にするため他家から引き取って育てた女の子）保瑛の愛情悲劇を描くものだが、「近親相姦」を主題としており、ここに島崎藤村『新生』の影響が認められる。先行研究によれば、『梅嶺之春』は『新生』上巻との類似（人物設定、場面描写など）が多く、原文のまま引用された段落までであるという。しかし、『梅嶺之春』は『新生』を単純に模倣したわけではない。作中には張のルーツである客家の山歌なども取り入れられ、客家文化の特色や時代の特色を表現しており、両作品の異同を検討する余地はまだあると考えられる。

本報告では、『梅嶺之春』は確かに『新生』をもとに作成されたものと考えられるものの、主題に違いがあることに注目したい。『新生』は個人の「懺悔録」であり、作者自身の「新生事件」をもとにして告白と清算を主題とした作品である。それに対して、『梅嶺之春』の主題は封建社会の旧制度が若者に対して及ぼす迫害を告発したものだと言える。さらに本報告では、主に客家文化を代表する山歌の象徴的意味をヒロインの保瑛のイメージに結びつけ、一九二〇年代に進んだ女性解放運動を背景に、客家文化における女性抑圧の陋習への批判という小説の主題を考察した。

II B-3 中国詩における「格律」の追求と近代アメリカ詩学教材——一九二〇年代初期の聞一多と吳宓を中心に

黄 詩琦（京都大学非常勤講師）

一九二二年、聞一多は「律詩底研究」を、吳宓は「詩学総論」を、それぞれ書いた。両者はいずれも「格律」の角度から詩を論じたものであり、中国古典詩の形式的特徴を説明する意図があった。先行研究によれば、聞一多は中国詩の特性を最もよく表す律詩を考察の対象に選び、白話自由詩に異議を唱えようとした。一方、吳宓は白話自由詩に反対し、古典詩の韻律と詩型を保存すべきだと主張している。本発表はこれらの研究を踏まえ、両者の詩の「格律」に関する議論と近代以降のアメリカ詩学教材との関係に注目し、一九二〇年代初頭の中国における詩学の文化接触について検討するものである。

吳宓の「詩学総論」は、ハーバード大学で受講した「抒情詩」で使用された教科書、すなわち R・M・オールデンの『詩学入門』に基づいていることが確認できる。一方、聞一多の「律詩底研究」は清華留美予備校時代に執筆されたものであり、その参考文献を検討すると、R・M・オールデンの『詩学入門』、吳宓が受講した「抒情詩」の担当教員ブリス・ペリーの『詩学入門』など、二〇世紀初頭にアメリカで出版された詩歌研究の著作に影響を受けていることがわかる。

二〇世紀初頭のアメリカ詩歌研究を探る上で、一七五〇年代から一八五〇年代にかけての英語圏で「文学 literature」の近代的な観念が形成されていたことは無視できない。近代的な「文学」は、過去の中心的なジャンルであった詩の歴史をそのまま自分自身に接ぎ木することで、長い歴史を持つものとして自画像を描くことができた。こうした近代的な「文学」観念に影響されつつ、吳宓は、「文学」の古典的理解を求める新人文主義にも影響を受け、中国詩の伝統を守ることの重要性を説いた。また聞一多は、詩の改革には賛成だが、中国詩を捨てて西洋詩と置き換えるべきではないと強調していた。本発表は、詩における韻律に対する聞一多・吳宓共通の関心が、当時の中国における白話詩運動に加え、アメリカ詩歌研究からも影響を受けたかどうかを探ることで、二〇世紀初頭の中国と西洋の交流の中で、詩や「文学」がどのように再構築されていったかを説明しようとする。

II B-4 『学生雑誌』読者交流欄における「新文学批判」について

方 逸韻（大阪大学大学院）

学生を中心とした青年の一九二二年から一九二五年までの爆発的な新文学創作への参入を、茅盾は「ナイルの氾濫」と呼んだ。一九二〇年代には新文学に耽溺する青年たちへの指導や批判は、よく見られる話題であった。誌面改革によって口語文を全面採用し、学生の高に高い人気を博した『学生雑誌』（商務印書館発行）でも、特に一九二三年から一九二四年にかけて同様の批判的言辞が見られる。

先行研究で指摘されているように『学生雑誌』における「新文学批判」は、革命理論の宣伝に力を入れた中国社会主義青年団の機関誌『中国青年』と共通性を持つ。また、新文学批判は、一九二四年の第一次国共合作や国民党改組の動きとも関わっており、青年たちを文学活動から社会運動へ導こうとする、中国社会の党派性へと向かう動きを反映したものだ。

『学生雑誌』編集長楊賢江は、このような青年の社会参加を熱心に唱える一方で、青年の間に存在した文学への熱意にいかに対処するか、つまり当時の青年が傾倒する文学作品そのものをどう捉えどのように評するか、という課題にも直面していた。該誌は「通訊欄」を用いて読者との交流をしており、例えば第一期一〇号で、ある読者は青年の退廃（的文学への志向）は現実への批判であり革命の先駆けだと述べ、楊はこれに、自分が反対するのは文学そのものではなく、鬱屈して退廃的な人生を送りながら「新文学作家」を自称する人々が、これみよがしに発表する、勇氣も生命も持たない「作品」にこそ反対しているのだ、と答え、世間に溢れる雑誌が文学関係ばかりであることに苦言を呈している。

本報告は、このような『学生雑誌』における交流に着目し、新文学批判をめぐる言説を中心に取り上げ、さらに、掲載された文学作品にも言及して、新文学の創作主体を担う青年・学生をめぐり、当時の中国社会にどのような文学観が形成されつつあったのかについて考察する。

II B-5 『沈香屑・第二炉香』の内外——張愛玲が描く香港の白人社会

林 麗婷（関西学院大学）

張愛玲（一九二〇～一九九五）『沈香屑・第二炉香』（一九四三）は香港に暮らすイギリス人の群像を描く短篇である。大学の教授であるロジャー・アルバートの新妻スージー・ミツチェルは、性に対して無知だったために新婚初夜に家から逃げ出してしまふ。この醜聞のためにロジャーは失職し、最終的に自殺に追い込まれる。同じ創作時期のデビュー作『第一炉香』に比べて、本作はあまり注目されおらず、研究も少ないのが現状である。本発表は張愛玲の性教育の問題に対するスタンスから『第二炉香』を再考したい。まず、一九三〇～四〇年代の香港イギリス人社会の結婚や家庭状況を調べて作品のコンテクストを明らかにし、本作が植民地香港で暮らすイギリス人社会の狭隘や浅薄を鋭く抉っただけでなく、彼らの内部にある差別や衝突の問題をも突きつめていることを指摘する。次にヒロインのスージーが受けた家庭教育に注目し、スージーの母の造形を考察する。未亡人であるミツチェル夫人は新聞を細かくチェックするなど、三人の娘を厳しく育てた。娘たちが性に対して何も知らないまま成長したことが悲劇の引き金となっている。ミツチェル夫人はイギリスの保守的な道德観や抑圧性を体現しているのみならず、帝国の遺産＝残照のシンボルでもある。さらに、夫となったロジャーが考えた「愛の教育」のあり方を検討し、サマセット・モーム『五彩のペール』を引き合わせて小説の結末、特に主人公の死を考える。最後に、五四運動以降の中国における性教育の議論を踏まえ、張愛玲のほかの作品を参照しながら、彼女の性教育に対するスタンスを明らかにする。『小団円』や『同級生』など生前未発表の作品で、ヒロインの性体験や張競生『性史』に言及するシーンが描かれていることを考えると、張愛玲は一貫して性教育の問題に関心を持っていたことが明らかであり、『第二炉香』はその原点にある作品と位置付けられよう。

II B-6 徐志摩「關於女子——蘇州女中講稿」にみる一九二〇年代中国の女性文学観

辜 知愚（奈良女子大学非常勤講師）

一九二八年十二月十七日、徐志摩（一八九七—一九三一）は蘇州女中にて講演を行なった。この講演では、女性が文学創作を行うことについて古今東西の例を引きながら論じ、聴衆を激励した。特に興味深いのは、西洋留学組である徐志摩が、女性の著述活動の困難さを説く際、西洋に肩入れすることなく、十八、十九世紀のイギリスと清朝の中国の女性の著述活動環境を比べれば、我が国の清朝の時代の方がまだましだと語るところである。

この講演稿を取り上げた先行研究では、徐志摩のフェミニズム意識、またはヴァージニア・ウルフからの影響が指摘されている。しかし、清朝の中国の女性文学に関する部分では、同時代中華書局から出ていた梁乙真『清代婦女文学史』（一九二七）の影響が確認される。梁乙真『清代婦女文学史』は、謝无量『中国婦女文学史』（一九一六）とともに、前近代の女性文学史という学問領域を発見し、構築した重要な書物である。これらの女性文学史が同時代の知識人に与えた影響は、従来、見落とされがちであった。発表者は、徐志摩の講演の内容も、このような前近代の女性文学史の発見・構築の文脈で捉えるべきだと考える。さらに、徐志摩が「新女子」「旧女子」の文学創作の違いについて説くところは、新文化運動以来の「文学」と「女性」をめぐる「新」「旧」の意識が反映されている。

本報告は、徐志摩のこの講演稿を、単に一個人の思想としてとらえるのではなく、一九二〇年代中国の女性文学観を反映するものとして位置付け、探ることにしたい。

II B-7 魯迅「スバルタの魂」執筆意図考

陳 曉淇（関西大学大学院）

一九〇三年六月十五日『浙江潮』第五期の一五九〜一六四頁に掲載された「小説 ス巴達之魂」（以下、「スバルタの魂」と称す）及び同年十一月八日『浙江潮』第九期の一三三〜一二七頁に掲載された「小説 ス巴達之魂（續第五期）」は、魯迅の第一作とみなされている。

魯迅自身は「スバルタの魂」を「譯（翻訳）」と主張するが、この作品は特定の底本に基づき翻訳した文章ではないゆえ、出典を見極めることが極めて難しく、李昌玉「魯迅創作的第一篇小説應是『斯巴達之魂』」、吳作橋「再論『斯巴達之魂』是創作小説——与樽本照雄先生商榷」などのように、「創作説」も浮かび上がっている。樽本照雄「魯迅『斯巴達之魂』について」から森岡優紀「明治雜誌記事と魯迅の『スバルタの魂』」、李冬木「从『斯巴達』到『斯巴達之魂』——『斯巴達』話語建构中的梁启超与周樹人」などの一連の研究により、「スバルタの魂」の出典はほぼ確定したが、後半部分に登場する女主人公「涖烈娜」の出典はまだ確定されていないため、創作作品か翻訳作品かの定義は難しい。

本発表は、まず女主人公「涖烈娜」の出典を特定し、「スバルタの魂」の出典を全面的に考察することによって、改稿部分の特定及び分析を行う。「スバルタの魂」のテキストの生成過程に注目すると、「スバルタの魂」が単なる翻訳ではなく、一部において意図的に改稿した可能性を指摘することができる。この可能性を踏まえ、作品執筆の背景と翻訳史における位置づけを視野に入れ、改稿の理由について深く追究することによって、魯迅「スバルタの魂」執筆の意図の解明を試みる。

II B-8 曼陀の翻案小説『滑稽小説 女学生旅行記』（下巻）における女学生描写

——五峰仙史『続滑稽女学生旅行』との比較を中心に

呂 輝非（名古屋大学大学院）

清末の時代、西洋近代的な価値観が中国に流入し、男女平等や女権という観念も注目を浴び、女性を男性と同等の社会構成員として見直す必要があると知識人たちは考えるようになった。その中に、纏足、女子教育、恋愛などの問題も中国知識人たちから注目されてきた。こうした動向に大きくかかわったのは、康有為と梁啓超であり、彼らの指示に従って、狄葆賢と羅孝高は上海に新聞の『時報』を創刊し、出版社の時報館を設立し、そこから翻訳小説を多数発行することで、女性に関する新しい観念の啓蒙に積極的に務めたのである。

そうした中、一九〇七年と一九〇九年、時報館の附属出版社である有正書局から曼陀の『滑稽小説 女学生旅行記』の二冊が出版される。その上巻に記載された前書きによると、この著作は日本の五峰仙史が書いた『女学生旅行記』を翻案したことがわかる。すなわち、曼陀翻案の上巻は、東京の大学館から発行されたばかりの五峰仙史の小説『滑稽女学生旅行』、下巻は同じ五峰仙史の『続滑稽女学生旅行』を原本としたものであった。

本発表では、五峰仙史『続滑稽女学生旅行』と、曼陀によるその中国語翻案との比較検討を行って、発表者がこれまでに発表した同作の上巻への考察を踏まえて分析する。曼陀の翻案には日本語原文には明確な対応をもたない箇所が多数あり、本発表はこの加筆部分に焦点をあてる。とくに、主人公である日本人女子学生の玉枝と阿松が、高等女学校で、男女学生の恋愛劇を鑑賞する節などを中心に考察して、時報館の知識人が日本社会の女性や恋愛観について、何に重点をおいて中国に伝えたのか、その特徴を明確にしたい。さらに、中国知識人が同時期の日本における恋愛観をどのように受容したのかを明らかにしたい。

II B-9 旅する字書——近世における『諧聲品字箋』受容の諸相

孫 楊洋（京都大学大学院）

明末清初期に成立した字書『諧聲品字箋』は、清朝を通じて知識階層における存在感は薄かった。四庫全書についていえば、かろうじて存目として残されるに過ぎず、館臣による消極的な評價も提要には見られる。

中国本土での冷遇に引きかえ、康熙年間後半に早くも『諧聲品字箋』は海外に傳わり、特に十八世紀以降の知識人に重寶されたことは、西洋や日本の文献記録に確認できる。韻に従って斬新な編纂方式を採用した『諧聲品字箋』は、欧州においては、一七〇四年にそれに基づく語彙集が作られたのを皮切りに、十八世紀を通して宣教師により漢語學習の題材として重視されてきた。日本でも、寶永年間に初めて舶載されて以來、幕末に至るまで學者、僧侶さらに徳川將軍にも廣く讀まれ、その字義に關する「箋注」も文献にしばしば引用されている。

しかし、海外に齎された他の字書と違い、『諧聲品字箋』は單に中國語の教材或いは解説書に引用された補助的な書物として使われたわけではない。その字義に對する個性的な「箋注」は人目を引き、文字學の論說に援引されるのみならず、宣教師によりキリスト教義の解釋にまでも利用されている。さらに、その字體は十八世紀のフランス人が深く偏愛し、それを模範として大量な漢字の活字を作ったことも、最近の研究で明らかになった。また、その特色ある音注方式は江戸時代の儒者に注目され、新井白石の『東音譜』にも影響を與えている。

なお、同時代の『字彙』・『康熙字典』のような字書と比べると、『諧聲品字箋』は吳語的な音韻體系を持つことが先行研究で指摘されている。しかし、方言文献でありながら、欧州と日本、いずれにおいても官話字書として享受されていることも興味深い。

以上、本発表では各種文献における『諧聲品字箋』の現れ方を分析し、十七～十九世紀における字書受容の諸相が示す言語文化史的意義について、検討を試みたい。

II B-10 明嘉靖刊『雍熙樂府』のテキストとその時代背景

金 文京（京都大学名誉教授）

明代の嘉靖年間（一五二二—一五六六）に編輯、刊行された『雍熙樂府』は、それ以前の『盛世新聲』、『詞林摘艶』につぐ元明代の散曲、劇曲（雜劇の曲辞）の選集で、明代刊行の曲選としては最大のものとして、その後の『群音類選』などに大きな影響をあたえた。特にその雜劇の曲辞は、その後、嘉靖後期から萬曆年間に刊行された元曲選集である『改定元賢傳奇』、『元曲選』などとは本文の系統を異にし、元曲研究にとって貴重な資料である。また編者の郭勛は、小説『三國志演義』、『水滸傳』を刊行したことも知られ、明代白話小説研究の上からも關心がもたれている。

『雍熙樂府』の現存テキストには、嘉靖十年（一五三一）刊本、同十九年（一五四〇）刊本、同四十五年（一五六六）刊本（『四部叢刊』本）および萬曆年間、清の順治年間刊の節略本がある。本発表では、嘉靖年間刊行の三つのテキストについて、その関係を考察するとともに、編纂、刊行の時代背景についても卑見を述べてみたい。

Ⅲ 日本漢学部会

Ⅲ-1 江戸漢詩における中井竹山『詩律兆』の意義

劉 欣佳（早稲田大学大学院）

山井崑崙（？～一七二八）の『七経孟子考文』一九九卷（享保十六年〔一七三二〕刊）が『四庫全書』に著録され、市河寛齋（一七四九～一八二〇）の『全唐詩逸』三卷（文化元年〔一八〇四〕刊）が清・鮑廷博の『知不足齋叢書』（道光三年〔一八三三〕）に編入された事実象徴されるように、日本漢学の水準は江戸時代の半ば以降、清朝の学者にも注目されるまでの高みにすでに達していた。

懷徳堂第四代学主、中井竹山（一七三〇～一八〇四）の『詩律兆』十一卷（安永五年〔一七七六〕）は清朝の学者に知られることはなかったようであるが、発表者はこの著も江戸詩学の水準の高さを今日に伝える重要な詩学専著であると考える。少なくとも日本における漢詩の声律学、ひいては漢詩創作が、受動から能動へと大きく転じる重要な契機となった書であると位置づけられる。管見の限り、従来の研究において、本書の最大の価値である所の、それまでの日本の声律論において重視されることのなかった新たな各種声律が統計的に帰納されて提唱されている点に着目しその意義について説いたものは、未だ存在しない。本発表では、本書を中心に据えながら、奈良平安から江戸前期に至る日本の声律論にはなく、本書によって新たに提唱された声律に着目しながら、本書の新しいさについて述べた後、本書がどのように江戸後期の漢詩に影響を及ぼしたのかについて、具体的に論じてゆきたい。ちなみに、江戸後期を代表する漢詩人、市河寛齋も頼春水・杏坪・山陽も本書を極めて高く評価している。また、中国近代の学者兼詩人、黄節（一八七三～一九三五）の『詩律』は本書を全面的に踏襲したものであることを書き添えておきたい。

Ⅲ-2 清華大学教授劉文典の重建懷德堂訪問について——錢稻孫、曹禺らの集合記念写真を手がかりに

稻森 雅子（九州大学専門研究員）

この発表は、懷德堂記念会所蔵の清華大学旅行団訪問記念写真を手がかりに、旅行団及び劉文典（一八九一～一九五八）の重建懷德堂訪問に関する調査の中間報告を行うものである。

一九三六年四月十四～二十六日、清華大学教授劉文典が重建懷德堂を訪れ、碩園文庫の『楚辞百種』などを閲覽調査したことは、夙に知られている。劉文典は、日本留学中（一九〇七～一一年）に章太炎の下で学んだ国学者で、その著『淮南鴻烈集解』（一九二三年初版）、『莊子補正』（一九三八年完成）は現在、中華書局の新諸子集成及び続編に収められている。

重建懷德堂を中国の大学関係者が訪れた事例は、管見の限りこの二回のみで、非常に珍しい。本堂前での集合写真は、これまで劉文典訪問時に撮影されたものとされてきた。発表者は、これが一九三四年四月十九日に清華大学旅行団（錢稻孫教授引率）が訪問したときのもので、参加学生に、劇作家曹禺や言語学者吳宗濟、翻訳者尤炳圻らがいたことを明らかにした（「清華大学教授錢稻孫教授の重建懷德堂訪問記念写真について」（『懷德』第九十一号、二〇二三年一月））。

彼らは、いかなる経緯から重建懷德堂を訪問し、訪問時の成果はその後どのように活かされたのだろうか。錢稻孫（一八八七～一九六六）は漢奸とされたためか、資料は多くない。そこで鍵を握るのが、ここに事務所を置いていた静安学社であろう。外務省へ提出された旅行団の計画書には、静安学社と記されており、劉文典関連資料も同様なのである。幸い、同社幹事・石濱純太郎（一八八八～一九六八）の書簡整理が始まっている（玄幸子「石濱文庫所蔵書簡資料のweb公開に向けて」）（『KU-FORUMS』が開く——デジタル化時代の東アジア文化研究」、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター二〇二三年）。本発表では、これらの資料及び劉文典著作をもとに、訪問経緯や影響関係を考えてみたい。

Ⅲ-3 昌平鬢を中心とした填詞活動の再考——作品の成立過程をめぐって

陳 竺慧（山形大学）

日本では詞（詩余）は漢詩と比べてあまり注目されて来なかったが、平安時代の嵯峨天皇（七八六～八四二）より近代に至るまで、数こそ少ないものの詞の制作は試みられてきた。とりわけ江戸時代後期には、漢詩文の爛熟に伴って詞は一時脚光を浴びることになった。その中でも幕府の最高学府であった昌平坂学問所（昌平鬢）の関係者を中心とした填詞活動は極めて活発に行われ、多くの作品を遺した。「江戸時代に出た最大の填詞作家」とも称される野村篁園（一七七五～一八四三）と彼の門人にあたる友野霞舟（一七九一～一八四九）、日下部夢香（？～一八六三）がまさにそうであった。篁園は生涯に百六十六首、霞舟は四十首、夢香は四十四首ほど詞を遺しており、数首試作した程度にとどまる文人が多い中では際立った数だと言えよう。

なぜ詞はこれほど昌平鬢を中心とした局地的な流行を見せたのか。篁園らが頻繁に詞の唱和を行ったのは一八三〇年代、天保年間のことであった。田能村竹田の『填詞図譜』（一八〇六）はすでに世に出て二、三十年、明清の俗文学が注目を集めており、明清楽の流行も広がっていた。詞に興味を持つ文人は確かに増えたにも関わらず、詞を遺した作者は極めて少ない。それに対して篁園は一八三五年以降年間少なくとも二十首から三十首ほどのペースで詞を制作していた。彼らの活動時期は決して長くはなかったが、日本における填詞の歴史を考えると、特筆すべきことである（拙論「野村篁園を中心とした填詞活動について——天保期の詞人たち——」（『早稲田大学総合人文科学研究センター研究誌』第四号）参照）。しかし、その活動の実態は依然として不明な点が多い。

今回の発表では、野村篁園らの詩（詞）文集について再調査したことによって得られたいくつかの発見について私見を述べてみたい。

Ⅲ-4 「孤臣」としての成島柳北の漢詩文創作——『柳橋新誌』における『板橋雜記』の受容を中心に

陳 文佳（華東師範大学）

江戸幕府儒臣出身の漢詩人成島柳北（一八三七～一八八四）は明末の遺民余懷（一六一六～一六九六）の『板橋雜記』から啓発を受け、安政六年（一八五九）十月に随筆集『柳橋新誌』（初編を創作した。『柳橋新誌』の作品構成が『板橋雜記』に類似していることが前田愛氏によつて指摘されているが、両書のテーマは実に異なっている。幕府政権が崩壊した後、『板橋雜記』の主題に強く共感を覚えた柳北は、明治四年（一八七二）三月に『柳橋新誌二編』を執筆した。維新後、花街としての柳橋の変貌を記録しながら、時代の変遷を慨嘆した『二編』は、『初編』よりもっと深遠な創作意図が含まれていると考えられる。

柳北は『柳橋新誌』初編及び二編の創作において体裁・構成・創作趣旨などの面で積極的に『板橋雜記』を受容しており、旧政権への追慕とともに、浅薄な文明開化を批判している。また、維新初期の柳北の詩文を考察すると、幕府の「孤臣」として徳川家への忠節を標榜する彼の立場が明らかである。

柳北は漢文創作において清代散文を見習う傾向があると思われるが、そのなか、とりわけ明清鼎革の際の散文から「寓家国之恨於風月之情」というテーマを意識的に受け継いでいる。終生、明治政府に出仕しなかった柳北にとって、「家国之恨」は到底解消されず、その詩文創作に幾つかの痕跡を残している。

Ⅲ-5 富永仲基の「道」論——「誠の道」と「三教の道」の関係を中心に

項 依然（中国人民大学大学院）

富永仲基（一七一五〜一七四六）は江戸時代中期の大坂の町人学者である。彼は『翁の文』の中で当時の日本の「三教の道」（儒教、仏教、神道）に対して批判的な考察を行い、また「誠の道」という独自の論説を提出した。

仲基によれば、仏教と儒教はそれぞれインドと中国の「異国の道」であり、神道は日本中世からの「異時の道」であり、三者はいずれも「今の世の日本」には実現できない。「道」は特殊な風土や時代によって決定されるものであり、移植や擬古によって人為的に作り得るものではないからである。そして、仲基は「誠の道」を「今の世の日本に行はるべきの道」として提案するのである。「誠の道」と仏教、儒教、神道は異なる国と時代に生まれた「道」である以上、相互の間に「合わない」関係にある。一方、仲基は、「誠の道」と「三教の道」には共通の倫理性があり、「道」の実践行為は人間の内在的な善性が自然に現れるものであり、純粹に外在的なものではないと考えた。

総じて言えば、仲基の諸道間の関係についての理解は「合わない」と「合う」という二つの側面を含み、一定の緊張関係にある。その中で、「合わない」の関係は深層的、基礎的であり、諸道の特殊性、相対性に根ざしている。「合う」の関係は「合わない」関係を認めた上で、「道」に共通の倫理的指向があることを指摘している。過去のいくつかの先行研究は「合う」の関係にのみ焦点を当て、仲基の思想の底にある堅固な「特殊論」の側面を軽視してしまっていたということができる。

仲基の「誠の道」は『中庸』の記す「誠」を「道」の特殊論に解消し、最終的には「天道」「人道」「古」「今」の連続性を切り裂くものである。これは徳川儒教が提唱する普遍主義的な「道」論を転換する試みと言える。

Ⅲ-6 荻生徂徠「天」観の系譜・構造と意図

郭 俣（中国人民大学大学院）

荻生徂徠（一六六六—一七二八）の「天不可知論」と「天命論」は、徂徠の「天」観を理解するための重要な手がかりであるとされてきた。しかしながら従来の研究は、徂徠の「天」観について、行為者の身分（立場）違いという視点とそれに基づく区別が不十分である。また「天不可知」という表現を重視しすぎて、理論的に矛盾するという問題があった。本発表では徂徠が「天」という言葉を使った具体的なテキストを再検討し、「事天主体」と「事天行動」を区別して、徂徠の「天」観を説明し、その修辭戦略と意図を明らかにした。

結論として明らかになったのは、「聖帝明王」のみが徂徠の「天」観において唯一の「知天」主体であり、その一方で、「天不可知」という命題を成立させるため、徂徠は「法」の意味を十分に説明した上で、「法天」を「知天」に代替している。すなわち「聖帝明王」が「法天」を通じて礼楽刑政を制作した後、全ての人は「知天」する資格を失って、「知人事」（人事を知るのみ。「知先王之道」）の権利を持つだけになった。故に、全ての人にとって「事天」という行為は「敬天」の範囲内に限られることになった。それと同時に、徂徠は「天不可知」の合理性を証明するため、孔子の「事天行為」を中核として、『論語』を再注釈し、『中庸』にある孔子の「知天」という言葉も削除した、さらに、孔子を特殊な「聖人」とみなし、孔子以後の「天」に対する解釈の歴史を再構築した。

以上の通り、徂徠の「天」観は複雑な構造を持っており、「天不可知」という命題を理解するにあたっては、従来の単一な解釈モデルは不十分であることに注意する必要がある。つまり、徂徠の「天」についての語り方を検討した上で、それらを適切に区分し、その裏にある意図を考察する必要があると考える。

Ⅲ-7 頼山陽における蘇軾の文章の受容について——史論、策を中心に

謝 文君（北京大學大学院）

江戸時代後期の漢学者頼山陽（一七八〇～一八三二）は「日本の東坡」として知られる文人であり、近代以前の日本においても多くの蘇軾の文章に関する評点を著すなど、蘇軾の文章を重視していた。

本報告ではまず、数多ある蘇軾の文章の中でも、頼山陽が特に重視し推賞していたのは史論と策の二類であったことを、彼の著作全体の調査に基づいて明らかにする。そのうえで、文章評論家と経世家という二つの側面から頼山陽における蘇軾の文章の受容について検討を加える。

前者については、『増評唐宋八家文読本』『評本文章軌範』の評点（特に史論・策に関する評点）を検討することにより、次の点を明らかにする。頼山陽は、蘇軾の文章には「人情に近づく」という性格があり、そこには「比喻の拡大使用」とも呼ぶべき修辭技法への偏愛が見られると考えていた。また頼山陽は「文勢」を五つに分類し、蘇軾の文章に「勢を造る」と「勢に順う」の両面があることなどに着目していた。頼山陽の文章評点は、南宋の文章学の流れを継承しており、実用を重視する日本の文章学が字格から文話を経て文格へと発展したことを示すものであった。

後者の経世家としての側面については、『日本外史』『通議』を検討することにより、次の点を明らかにする。頼山陽は、蘇軾の政論を重視し深く学んでいた。特に蘇軾の思想に「民を以て本と為す」「実を重んずる」「人情に近づく」といった性格を見出し、それを継承しようとするなど、頼山陽の儒家思想・史学は蘇軾の経世精神を体現するものであった。頼山陽による蘇軾の史論・策の推賞は、現実社会の改造を追究した幕末の実学思想へと受け継がれ、いわゆる『東坡策』の流行を促すに至ったのである。

Ⅲ-8 昌平坂学問所における漢籍分類法の変遷について

カパツ・ダニーロ（慶應義塾大学大学院）

本発表の目的は、昌平坂学問所における漢籍分類法の変遷を明らかにすることである。そのために、同学問所の代表的な蔵書目録として、寛政十二年（一八〇〇年）に成立した『昌平志』巻四「経籍誌」、文政三年（一八二〇年）と同四年（一八二一年）の間に成立した『林家書目』、また、元治元年（一八六四年）以降に成立した『改正学問所書目』を比較、分析する。

管見の限り『昌平志』「経籍誌」以下三種類の蔵書目録について詳論した先行研究は、未だない。これまで、小野則秋氏（一九四二年）は、『昌平志』「経籍誌」の分類法が「経史子集」であると指摘した。高山節也氏（二〇一二年）は、『林家書目』は『昌平志』「経籍誌」を底本としたものであると指摘して、『林家書目』に見られる漢籍の残存状況の確認を行うにあたって、その分類法にも言及した。しかし、その言及は『四庫全書総目』に従う紅葉山文庫の『元治増補御書籍目録』と異なるものであると指摘したのみで、それ以上の議論はなかった。

そこで、本発表では、①『昌平志』「経籍誌」と『林家書目』の分類法は『明史』「藝文志」に倣うものである、②『昌平志』「経籍誌」と『林家書目』において、寛政期までに伝わった、あるいは購入された漢籍は、基本的に内容の成立時が古い方から排列されているが、一方で、それ以後に新たに購入された漢籍は、収蔵された順に追加されている、③文政期と元治期の間に、ようやく昌平坂学問所の蔵書目録の分類法が改変され、『改正学問所書目』のそれは、『四庫全書総目』に倣うものとなった、④『改正学問所書目』において、漢籍は収蔵年にかかわらず、すべて内容の成立時が古い方から排列されるようになった、といった四点について報告する。

以上、目録学の立場からなされる本発表が、昌平坂学問所における漢籍受容史を知る為の一助となれば幸いである。

Ⅲ-9 西川如見の「水土」論とその思想史的位置

石橋 賢太（日本学術振興会特別研究員）

西川如見（一六四八〜一七二四）は、近世日本において天文学や町人の道徳、さらに儒学思想など様々な思想を展開した人物として知られている。その如見の論点の一つとして「水土」をめぐる思想がある。「水土」とは土地や地理環境を意味する言葉であり、如見は『水土解辯』や『日本水土考』などの著作の中で日本と他国との地理や風習の違いを論じている。

「水土」に着目した議論は近世日本において盛んになされており、山鹿素行（一六二二〜一六八五）や熊沢蕃山（一六一九〜一六九一）がその代表的論者である。如見は『水土解辯』において蕃山の手になる「水土解」（『集義外書』所収）を読んで、その所説に敬意を表しながらもなお「不審」な点があることから『水土解辯』を書くことにしたのだと述べている。実際、『水土解辯』を読むと如見は蕃山の説に批判を加えており、如見の「水土」論は蕃山を批判的に継承したものであることが分かる。蕃山と如見との考えの違いには、十七世紀後半と十八世紀初頭という時代の差や如見が長崎に居住していたことから海外事情に接する機会が多かった事情などが影響していると考えられ、両者の「水土」論における同異を明確にすることは思想史的な意義が大いにあると思われる。

しかし、蕃山と如見との「水土」論の比較は藤原暹の論文（「熊沢蕃山と西川如見―水土（風土）観を中心に―」『季刊日本思想史』第三十八号、ペリカン社、一九九二）を除いてほとんど存在せず、如見に先行する議論との関連から彼の「水土」論を思想的に位置付ける研究は未だ十分ではないのが現状である。そこで、本発表では如見の「水土」論の内容を検討した上で素行や蕃山のものと比較を行い、そこから見える如見の思想の特色や時代背景などを明らかにしていく。

Ⅲ-10 茉莉園詩派の『茉莉花』詩に関する一考察——艶詩のpotentialityに着目して

安原 大照（東京大学大学院）

本発表においては、幕末明治の漢詩人森春濤が形成した詩派「茉莉園詩派」の作品の中で、茉莉花を詠じた艶詩に着目した上で、茉莉園詩派における「茉莉」同胞意識の特質、意義は如何なるものであったのかというテーマについて取り扱う。

森春濤らが拠点にしていた「茉莉凹巷処」に「茉莉」の名が含まれていた理由について、従来の森春濤に関する文献は、茉莉凹巷処の付近にある、徳大寺に祀られていた摩利支天と縁の深い「茉莉夫人」より名を取ったことが由来であろう、と指摘している。確かにその事は名づけの一要因として考えられるが、「謝杉山三郊送牽牛花」（『槐南集』巻七に所収）に「我家茉莉元更香，鬢霧横陳嬌半牀。」とあるため、茉莉凹巷処の庭園には实在物としての茉莉花も植栽されており、また茉莉吟社の詩誌『新文詩』には茉莉花を詠じた詩が多く掲載されている事から、茉莉花は詩社の象徴としての役割も果たしていた事も分かる。茉莉園詩派における「茉莉」というキーワードは、従来よりも重視される必要があるだろう。

茉莉花を中心とした、彼らなりの共有意識を分析する際に、当時の文人間で共有されていた「支那趣味」に注目する事は、有効であるように思われる。永井荷風『現代と支那趣味』の記述から、当時の「支那趣味」の庭園には茉莉花が植栽される事が多く、また明清の庭園に関する書物に従って造園された事が分る。そこで本発表においては、『園治』などの明代の庭園理論書を参照した上で、茉莉園詩派の詩人たちの茉莉花に対する愛好や、茉莉巷凹處に対する認識の構造を、近代都市と化しつつあった明治東京と関連づけながらモデル化することを試みる。これらの分析を通じて、近代文人世界における茉莉花の表象を浮彫にし、森春濤及びその後継者の艶詩が有していた、新たなpotentialityについて検討してみたい。

Ⅲ-11 創作白話小説の方法——『白話文集』を中心に

宮本 陽佳（京都先端科学大学）

日本における白話小説の受容は、近世中期頃より本格化したとされる。当時の現代中国語である唐話を学ぶため、「教材」として注目されたのが大きな契機となったのである。やがて白話小説は「教材」という位置づけから、物語を楽しむ「読み物」となつて人々の関心を惹き、その受容層を拡大していく。発表者はこれまで、享保（一七一六〜）以降に行われた『水滸伝』講読の実態と和刻本刊行の関連について検討し、特に宝暦（一七五一〜）頃から「読み物」としての認識が広まったのではないかと推測してきた。

『白話文集』（仮題、長澤規矩也氏旧蔵）は日本人の手による白話文七篇を収録する写本で、明和年間（一七六四〜一七七二）頃までに上方でまとめられたものと見られる。七篇それぞれの成立については未詳であるが、当時の風聞を短篇白話小説に仕立てた一篇には、寛保四（一七四四）年以前、つまり白話小説がまだ「教材」的位置づけであったと発表者が想定する時期に書かれた可能性が指摘出来る。作者に擬されているのは、研究と出版の両面から白話小説受容を推し進めた澤田一斎である。一斎は『水滸伝』講読を行ったほか、「三言二拍」の訓訳本『小説粹言』（宝暦八／一七五八年刊）を手掛けているが、宝暦以前の彼の唐話学習、白話小説理解について示すものは決して多くない。

本発表では、『白話文集』中で一斎が作者に擬されている創作白話小説に着目し、その創作方法、題材選択について検討する。彼がなぜ創作を行ったのか、また創作を通してどのように白話小説を理解していったのか明らかにしたい。そして、創作という営為を含めた日本の白話小説受容史はどのように構築し得るのか、考察を試みる。

III-12 池田大伍の元雑劇論について——中国戯曲受容の視点から

徐 爽（韶関学院）

江戸時代に元雑劇のテキストが日本にもたらされて以降、レーゼドラマとしてとらえられているのであって、演劇としてとらえる例が少なかった。井上泰山氏が述べるように、元雑劇の舞台芸術としての特徴を日本の芸能に活かそうといった意識が薄かったが、一例として挙げられるのが池田大伍（一八八五—一九四二）である。池田氏は劇作家としてよく知られている一方、中国戯曲翻訳・研究・改作の成果が中国文学研究者にはあまり気づかれず埋もれたままのように思われる。

本発表は中国戯曲受容の視点から池田氏の元雑劇論に対する考察を加えた上で、池田氏にとつての元雑劇の持つ演劇としての優れた点（例えば曲詞に動的要素が多くて舞踊化しやすい、主役一人のみが歌い脇役が賓白だけを言うなどを明らかにし、元雑劇研究史における池田氏の功績を述べる。当時は元雑劇研究と言えたい中国文学史、演劇発達史の角度から研究されるのが常道で、本格的な演劇学の視点から元雑劇を研究する学者は極めて少なかった。また、池田氏は新歌舞伎などの日本の芸能に元雑劇の優れた点を取り入れようと模索してもいた。本発表ではその意図についても検討する。

池田氏の元雑劇論は元雑劇研究史に残るべき存在だと考えられる。また中国戯曲の海外受容史の一端として有意義な存在である。今後は、海外における中国戯曲受容史・中日演劇交流史における池田大伍の位置づけを再評価することを目指す。

Ⅲ-13 「宋四大書」の日本における受容について

張 仕琪（広島大学大学院）

「宋四大書」は『太平御覽』、『太平広記』、『文苑英華』、『冊府元龜』という四つの類書を指す。宋の太平興国年間（九七六～九八四）に太宗は文教事業の発展に力を入れ始め、「宋四大書」の編纂はこの時期に始まった。「宋四大書」は宋以前、特に唐代の学術成果を受け継いだ、宋初における学問の集大成の作と位置付けられ、宋学の基礎となり、新しい学問領域の開拓に大きな役割を果たした。

「宋四大書」の日本への伝来は『太平御覽』の渡来を先駆けとして、その後『太平広記』、『文苑英華』、『冊府元龜』が順々に伝来した。この四つの類書の伝来は宋学が日本に伝わったことを示しており、奈良時代以降、数百年來「唐風」の影響下にあった日本の社会文化が、宋学の影響を受け始めた転換点とも言える。また、「宋四大書」はそれぞれ成書の時期が極めて近く、最初に完成した『太平御覽』から最後に成書した『冊府元龜』まで、せいぜい三十年ほどしか隔っていないが、日本に伝来した時期は数世にわたっており、大きく異なっている。その伝来の時期にばらつきが生じた要因も興味深い問題である。

「宋四大書」は鎌倉時代以降の日本における学問の発展に重要な影響を与えたが、先行研究から見ると、それに関わる研究が多いとは言えない。管見の限り、『太平御覽』と『太平広記』の日本における受容に関する先行研究はあるが、「宋四大書」を研究対象として、その日本における受容を研究したものはほとんど見られない。では、「宋四大書」は成立してから、いつ頃日本に伝わり、日本にどのような影響を与えたのだろうか、なぜ日本に伝来した時期に違いが見られるのだろうか。今回の発表では当時の歴史背景のもとに、以上の問題について考察を加えたい。

Ⅲ-14 忘れられた漢詩人千葉昌胤の渡韓以後——日本漢学史における植民地文学の一展開

辻井 義輝（東洋大学客員研究員）

発表者は、二〇一八年来、千葉県における漢学の普及・展開を包括的に調査し続けている。この過程で、忘れられた漢詩人千葉昌胤（千葉県旧市原郡出身）を見出し、昨年、本学会において、この人物の前半生について発表した。本年は、千葉昌胤の生涯と文学につき、明治二十七年、二松学舎を離れて渡韓して以後、その死に至るまでに焦点を当てて発表したい。

昌胤は韓国に二度、渡っている。一度目は、明治二十七年十月二十六日のことで、特命全權大使井上馨の幕僚の一人として、参加したものだ。しかし、この際は、明治二十八年に閔姫が暗殺され、韓国人たちの対日感情が険悪となり、身の安全を保ちがたくなったのと、昌胤自身の個人的事情により、明治三十年初頭、はやばやと帰国している。その後、約十年の潜伏期間を経て、二度目の渡韓を明治四十一年に遂げている。この際は、まず韓国における警察庁の嘱託となり、警察改革史の著述に従事した後、さらに、奎章閣に所属し、大量の朝鮮王室所蔵漢籍の整理に携わっている。そして、その傍ら、当時の韓国の文人たちや、さらに、日本から韓国にやってきた漢詩人たちと活発な漢詩文の交流を行っている。

交流のあった文人には、まず韓国側に、金杏漁、李載克（男爵）がいた他、久保天隨によって、金雲養に次ぐ漢詩人として評された鄭万朝もいた。日本側には、総督府統監曾禰荒助のほか、新潟県新発田出身で、「槐南門の四天王」の一人と目された佐藤六石、旧会津藩士で、朝鮮における第一の詩人と評された松田学鷗、静岡県島田出身で、釜山開成学校を開いた荒浪岳川、佐賀県小城郡多久村出身で、後に日本における中国語学会の元老と目された草場謹三郎らがいた。このような華々しい文学活動をした昌胤であったが、大正六年には病気に見舞われて帰国を余儀なくされ、翌年三月、当時、沈滞気味であった東京の漢詩界を再興することを期待されつつ、東京郊外の寓居で急死した。

託児所のご案内

今大会では、託児所を設置いたします。希望される会員は下記の要領で事前にお申し込みをお願いします。

1. 概要

• ご利用資格

本大会に参加される会員で、0歳児から未就学児までのお子様がいいらっしゃる方。

• 業務委託先

大阪大学ダイバーシティ&インクルージョンセンターを介して「株式会社ポピンズファミリーケア」に業務委託いたします。

• 開設場所

豊中 commons 1F(一時預かり保育室)に開設いたします。当日受付時にご案内致します。

• 開設時間

10月7日(土)9:00~18:00

10月8日(日)9:00~18:00

• 利用料金

半日(午前または午後のみ):1,500円

全日 :3,000円

※当日受付にてお支払い下さい。

• 保険

万が一の事故に備えて、委託業者が保険に加入しています。補償については、保険会社の規定の範囲内となります。なお、日本中国学会ならびに大阪大学は、事故等に対する一切の責任を負いかねます。

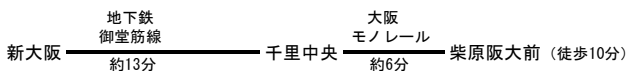
2. お申し込み

下記の大会準備会宛に9月22日(金)までにお申し込みください。

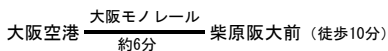
大会準備会 : japansinology75@gmail.com



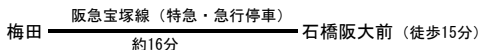
新大阪から



大阪空港から



梅田から



〒560-8532 大阪府豊中市待兼山 1-5
 大阪大学人文学研究科 浅見洋二 研究室

日本中国学会第 75 回大会準備会

TEL 06-6850-5112
 E-mail japansinology75@gmail.com